ゐ、それに關係した書籍は一切齎らせ行かれたのである。且此行或は歸途に北陸道の數ヶ國を布教せばやとの思召もあつた、それ故書物の荷物は猶更澤山にて恰も漢學先生の家移りかとも思はるる程であつた。而して余と幸田氏と最も閉口したのは旅舍に着て少しでも閑暇があると直ちに本を持てこいと呼ばれ、夜は必ず十時頃迄八宗綱要、七十五法名目などやらされたのには實に苦痛であつた。軈て一行は加賀の大聖寺町に到着し其客舍に(嶋田屋と號せしと覺ゆ)投宿した、玆には凡そ一週日間も滯留されてゐた。その故は當時新居日薩和上は東京を振錫して沿道の諸國を布教しつゝ來られ、此大聖寺町の宗壽寺と稱する本宗の寺院に於ても闡教がある豫定にて必ず當地に來着し給ふ筈であるゆへ、三村大僧正は玆にて和上と會合し立像寺に於る法要其他萬般の相談を遂げんと待ち設けられてあつたのである。されば旅窓別に用事もなければ大僧正は大に勉强せよとて學問を進められ、僕等は大僧正の前に机を運び終日屹屹として講授を受け其の時間は學校の課定以上であつた、且又中洲日振上人は曾て廣瀨淡窓の學塾に漢學を修められ特に吟調に巧みであるを以て、その教を受けよと命ぜられ、上人も亦懇切に教授せらるゝを以て早朝より四筵隣室の客の眠を驚かすにも一向頓着なく大僧正を初め一同は(但し服部氏を除く)聲を惜まず大聲を揮ひ揚げ、聯珠詩格中に在る一杯一杯又一杯だの、千山萬山星斗落だの、例の遠思樓節の吟聲を習つたのであつたが隨分無邪氣なものである。軈て旅屋の下婢下僕までが眞似をして仲々上手になり、板の間を這ひながら我醉欲眠君且去など吟ずる樣になつた、同宿の客人などは定めて迷惑したらうが當家の主人は大に喜んでゐた、蓋し風流隱于商賈とでも謂ふべきものであつたか。此間一日山城の溫泉に遊ばれた、邱壑林泉幽邃掬すべき洵に清娛に價する仙寰であつた、余等は稽古が一日休めたので幾何らか樂しみであつたか知れぬ。確か月の十七日と覺ゆ新居和上は宗壽寺へお乘込になりたり、待ちに俟ちたる三村大僧正は通知に由り直ちに往訪せられ、余はその供をして初めて和上の芳顏を拜した。是に於て和上と大僧正との諸般の打合を了し給へば、越て一日愈々中洲上人と相伴うて金澤に入り野田寺町妙法寺に挂錫さる、是れ本圀寺末なるを以てなり。尋で翌日新居和上着車になり直ちに立像寺に投ぜられた。流石に新居三村兩和上共曾て多年日輝大和尚の帷下充洽學園に螢雪の功を積みてゐられた舊因緣のある金澤である故、舊交相知も多きことなれば兩和上孰れも金澤御到着の折は、僧侶信徒の歡迎は非常に殷盛なものであつた。歡迎人の中よりは往々あれ文嘉サン(日薩和上の所化名)がごさしつた。ヤレ圓省サン(日修和上の所化名)が見えた、ド豪いものに

ならしたものだなどと評し合ふものの聲を耳にした、新居和上の隨行員としては今の守本文靜僧正及び故河瀨智宏子、故逸見通丈子、頂岳龍觀子、田中存要子の五君であつた。余が守本僧正を初め諸子に面會したのも此時が最初である、が先方樣は皆東京大敎院の堂々たる上級生で威張つたものであるに、余は何分未だ下等學科未卒業の眇乎たる名もなき靑書生なれば先方樣は一向目にも留めては吳れなかつた容子である。日薩和上と前後して到着されたのが久保田日龜大僧正（當時中山法華經寺貫首）故福田日耀大僧正（當時京都妙顯寺貫首）で孰れも布敎先より會同されたのである、而して越後中敎院よりは故小林是純大僧正（卽ち日董上人）加藤日慶僧正（當時越前大道妙泰寺住職）旭日苗僧正（當時越前の某寺住職）鋤田孝山子は藻原中敎院より、其他法將義虎が東より西より南より北より輻湊參會されたのである。但だ故吉川日鑑和上のみは當時越後を御布敎中にて何故か竟に來臨し給はざりしは實に遺憾であつた。が併し日薩上人は總本山身延の前貫首であり、三村大僧正の本圓寺、久保田大僧正の中山法華經寺、福田大僧正の妙顯寺、中洲上人の池上本門寺、兎も角も本宗の五大本山貫首が一堂に會同され和氣靄々の間に嚴肅淸淨の大法要を修められたといふとは、眞個に空前の壯觀、恐らくは絕後の勝妙事ならむと人も吾も坐ろに感激して益々以て優陀那老和上の學德の高崇偉大なるを憬憧した。偖法要は二十一日より二十五日迄五日間と定められた、時の立像寺住職は故中川日示子で法要の奉行職とも云ふのが故津川日濟老師、修法の次第は能くは記憶せぬが禮法華、觀心贊、五種法師等を修められた、乃ち觀心贊と五種法師中の法華經一部の解說は、優陀那老和上の著作に屬して津川老師の校訂せるもの、其文章の婉曲優麗なる、少しく文字あるものは讀むに難からず、能く品々の大意に通ずるに足れり余は平素婦人會など婦人の信仰修養の會に於て、各自に習ひ讀まし めたならば餘程爲になる所があるであらうと思ふてゐる。當時此の法要に列したる四衆の中、比丘の部は言はずもがな、比丘尼優婆塞優婆夷の內には曾て大和上の會下に參して直接に薰陶講授を受けたものも尠くなかつたのである。されば觀心贊及び五種法師の修行など、誠に順序齊肅に行はれ、眞に殊勝に感じた。五種法師に就て此の修法を終つた夕まぐれ、禮伊藤富葛翁の夫人（此の夫婦は俱に老和上の會下に鉗鎚を受けた人である。）が子女など率れて日修大僧正を妙法寺に訪れられ、今日解說を爲された中に調子が巧く聲が最も美はしく誠に上手に捧讀をやつてのけた人がありましたが、あの方は貴僧のお率れなさつた御隨身ださうですな——妾は餘り聲が優美（やさしい）ので何處かの尼法師か知らんと思うてゐましたと、語らるるを襖越

しに聞き取りて、乃公頗る得意がつて低い鼻を高くしたこともあつたが、僕は法師品の解說をやつたと覺えてゐる。それは兎も角武骨斑髯の僕も尼法師に間違へられた時代もあつたかと思ふと益々隔世の感に堪へぬ。五日間法要の大導師は日薩日修兩和上が隔日に勤められた、這般は兩和上が共に優陀那老和上の上足たりしを以てゞあらう。初め導師に就ては、先づ日薩和上から、之は老和上生前中門生の學班に據るが當然だらう。それには圓省師が吾よりも上班であつたから日修上人に勤めて下さいと仰せられて謙讓遊ばされた。スルト日修和上も固より謙讓の御方なれば何條承諾せらるべき、老和上の生前は生前として、今日は尊者が上位なればどこまでも日薩上人に勤めて貰はねばならぬと、互に讓り給ひ勿々に決しない。於茲一種の抗議が意外の邊より沸騰した、そが主唱者は中洲耀妙上人である、曰く三村師は吾も曾て多少文字を受けた師なれども今吾は苟くも池上本門寺住職たり、本門寺は則ち大本山中の筆頭にして三村師の本圀寺の上に位せり、吾若し彼を導師として其下に就かば則ち本門寺を辱しむるもの、吾豈忍びんやと飛んだ所で門閥論を擔ぎ出し日修和上導師說に反對を試みられた。蓋し這般法要は政て本山末寺といふ資格を以て集ひ營まるるにはあらで單純に學師に對する報恩なれば門閥論を出して位地の高下を諍ふ場合ではない、是れその新居和上が充洽學園の往事を想うて三村和上に讓られた所以である。然るを耀妙上人の門閥論は少しく常識を逸した野暮の骨頂であつた。が思ふに兩和上の謙讓は則ち美德とは申し乍ら既に法要の差迫り居る折柄徒らに相讓り給ひて導師が決定せずば大に差閊へる事なれば、速に斷案されべく一の方便として中州上人は門閥論を出されたのであるかも知れぬ、爾れば上人の衷情大に諒とすべきである。於是乎。津川日濟老師が双方の間に立入て仲裁を試み折衷說を出して大導師は日薩日修兩和上が隔日に勤められることになつたのである。祭文は野口之布先生の撰に係る老和上の碑文則ち今は池上に嶷立せる豐碑に勒されたる夫の文を守本僧正が靈前に代讀されたかの樣に記憶して居る。參拜者は五日間を通じて非常の廛集にてさしもに濶き立像寺の本堂も立錐の餘地なき程であつた、法要後は毎日說敎があり是も亦日薩日修兩和上が隔番に登高座され、前座には加藤慶師、旭苗師、河瀨智宏子、頂岳龍觀子等が勤められた、薩和上は妙法五字の玄義を說き蓮華釋に因みて優陀那老和上の高德を嘆ぜられ、又た修和上は充洽園の名に因み藥草喩品の率土充洽の敎旨を演釋して、故老和上は設ひ入滅し給ふともその御德は率土に充洽し天下に遍滿して決して滅しない、佛性常住は則ち是である、古の充洽學園は其校舍を廢亡して跡形を留めずなりた

れ共、その學園より輩出せるものはそれぞれ樞要の地位を占め育英の業を黽め後進の提撕に怠らず、則ち局部の學園は變じて宗門全局の學園となり、語を換ふれば日蓮宗門は卽充治學園なり、猶ほ演繹せば一天四海が擧て充治園なり、然らば充治園は決して滅せず益々隆昌に赴きつゝあり……壽量品の常住此說法の理も是れに他ならずとの意味の說敎にて、此の說敎は一會の聽衆に非常なる感動を與へ感涙に咽ぶものもあつた。蓋しその昔和上に充治學園に親炙して敎益を感孚したものが猶ほ多少生存してゐる。彼等は老和上入滅後僅かに廿五年たつかたゝぬに憐れ充治園の寮舍は廢滅して苔苺荒蕪に歸し、片影だも駐めぬ狀態に對し人情誰か愛惜せざるものあらんや。然るに今修和上より現實の充治園は滅亡すとも理想的の充治園は天下に存在して欣々榮えつゝあるぞとの說を聞き、偶、以て平生愛惜景慕しつゝある情念に向て大なる慰藉を與へられた。是れその說敎が特に一會聽法の衆に非常の感動を與へた所以であらうと信ずる、されば這般會中第一等の出來の說敎であり、薩和上も修師に對ひ今日の說敎は實に結構で難有く拜聽したと被仰た御語と、修師が御得意らしき神容とを僕は修師の御法衣をたゝみ乍ら見聞し奉り、今猶ほ恍として耳朶眼邊に髣髴たる感がある。舊の充治學園の墟址は立像寺の堂後墓地を隔てた處にある、乃ち庫裡の裏に出て墓石の間を縫て行く事數十步にして抵ることが出來る。一日薩修兩和上が先立ち給ひ、大勢が後に隨つて學園の舊蹤を弔し墓石の間など此處彼處と徘徊された。スルト加藤慶師が遠慮なく薩和上の後より、薩師樣此邊は昔貴方と禪厨から飯櫃を擔ひで走つた所でありますよと懷古談を初めらる。紫衣の大敎正隨身等の手前聊か返答に躊躇し苦笑一番、顧て他を言ふの風貌であつた、老和上の書齊は立像寺の庫裡に續いた奧の中二階樣の處にありて、前庭には高き樹の海棠が柔條扶疎として茂れるあり、恰も五月の候花盛に絢爛紅露を含むを見た。當年大賢が此の樹陰に坐し淵默玄思を練り、健筆一灑萬言立どころに成り、無量の法門混々として出現在前したる壯概高風を想見して、餘は一種のインスピレーションに打たれ惕然として襟を正した。

妙辯論玄又吐奇。等身著述後昆垂。高師遺韵在何處。一樹海棠紅露滋。

是れ當時の感懷である。乃ち新居和上は此の書齋を御居間として居られた、或日僕は三村和上の伊藤富葛翁を訪づれらるゝに扈從して行つた、新居和上が尋ねて先づ在らせられ、伊藤夫婦と荐りに懷舊談が交換された、新居樣――三村樣――日修樣――日薩樣――眞面目に敬稱語が用ひらるゝかと思へば忽ち文嘉サマ圓省サマ泰山サマ（故小林日昇上人）誠研サマ

（故吉川日鑑和上）秀泰サマ（故中田日阜上人）と稱呼され、そが談話の障壁なく靄然として親しきこと、その昔の充洽園裏の現象も髣髴され、又互に呵々と談笑して打興ぜらるゝのを傍に侍して見奉つたことがある。法要修行の淸筵に列り、何だか可笑き一の奇狀が現出された。そは夫の津川日濟老師が丁度維那の席に在り禮拜を行ふに彼が象の如き巨軀を先づ臀部より先に揚げて頭部を最後に動き起され象の如き聲して起座し給ふ態は尤も妙であつた。ああ當時此神聖な大法筵に打揃つて臨み給ひたる五大本山の先師先德今何處にかある、唯だ獨り久保田日龜大僧正の健在し給ふことあるのみ、充洽園の英物俊髦次第に徂落して殆んど隻影なく、目今實際充洽園に笈を負ふて書槃に膏を注いだは大阪の早川日悌上人位でがなあらう、中洲小林等の諸先輩既に逝り給ひ、河瀨逸見等の同學も亦此の世の人に非ず、法界轉た落寞、安んぞ今昔の感に耐ふべけんや、經には五十小刼佛の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂はしむといふ、余は之を翻案して半日の小時も自然力の故に諸の人間をして五十小刼長時間の如く謂はしむと言はんとす、云何んとなれば僕等の如き何等なす所なき者より見れば廿五年間は一夢のごと半日にも及ばない、爾れども自然力が人間を征服し碩德名師を擇ばず幾多人生消長の大波瀾を作せるその仕事の偉大なる點より察すれば一夢――半日の如き廿五年間の經過は、百年にも二百年にも其に五十小刼にも價ひする一大長程の如き感がする。然りと雖も自然力の能く征服する所のものは物質、形骸のみである、道德の權威靈力の存在に至つては不可抗的自然力も之を奈何ともすることは出來ぬ。然り先師先德の德學の權威靈力のそれは萬斯年磅礴として覆載の間に存在してゐる。修師の所謂理想的の充洽園は今も猶ほ繁茂し花紅柳綠未來永刼幾千代も淪滅すると云ふことはないと信ずる。況して優陀那大和上の卑見妙識――彼を一家學とするか、宗門的學とするかは問題であらうが、其能く法華の奥秘を開闡し本化の玄妙を助顯され宗學に偉大の光明を與へられた卓見妙識は千古沒すべからざるものがある。その動もすれば餘りに哲學に偏して信仰を輕んじた樣な嫌があるので一部區々の反對者があるが、併し彼等の輕々に批評する如きものではない、我が宗門が明治一新の大波動に遭遇しても何等狼狽する所なく、新居吉川三村吉田等の諸先師が在して諸宗の間水際たつて一異彩を放ち能く宗風を維持されたその活動力の淵源大勳業の根本は何處に在つたか、充洽園――老大和上に在ること、今更に餘輩の喃々を要せず知れきつて居る所である。

が近來老和尙を學ぶ學風は餘程退歩した樣である。それも研究の餘地がなくなつたとい

ふのではない、眞に忠實に研究するものがないのである。老和上は宗門の研究に向つて確かに一道の光明を與へられた。故に優陀那老和尚を通じて本化の蘊奥を仰鑽したならば必然獲得する所があるに相違ない、然るに老和上を批評し痛罵するものも否らざるものも碌々研究もせず、鵜呑主義なるは實に慨嘆に耐へぬ。アア今や則ち五十遠忌に遭遇しぬ、僕は此の機會に乘じ、大に老和上研究の氣運を喚起せんことを希望する。僕は曾て二十五回忌の法筵に列し今復た五十遠忌に値ひ奉り、生憎や身延貫首の九州御布教に隨行して池上に於ける大法會に參する事の出來ぬのは誠に遺憾である。前來記述する所は何分二十六年前の經驗を記憶の中より呼び起して書きつけたるものなれば、或は間違の廉もないとは云へぬ。幸に守本僧正鋤田孝山兄の健在なるあれば誤の點は正して載きたい。

一片青山五十年。誰能道統可相傳。輝門俊傑皆徂落。復薦蘋蘩淚黯然。

（戊申三月九州出發前一夜稿）

（日宗新報、創立一〇二五號、明治四十一年三月廿一日、以下數號）

執筆諸家

三觜　八郎　神奈川縣藤澤町羽鳥。元南谷學徒。昭和十二年七十七歳。
信夫　淳平　法學博士。法政大學教授。
平井　參　明治大學教授。八十歳。
酒井　日慎　池上本門寺、大僧正。八十三歳。
神保　日慈　中山法華經寺、大僧正。六十九歳ニテ十二年二月廿二日寂。
望月　日謙　延山、管長大僧正、七十三歳。
田中　智學　靜岡縣原田村鑑石園、七十七歳。
清水　龍山　日本寺、立正大學學長。
久保田桂秀　村松海長寺。
河合　日辰　京都妙顯寺、八十三歳。
吉田　日照　舊稱牧口泰存。新潟縣柏崎妙行寺、七十三歳。
今井　亘舜　靜岡縣興津理源寺、一眞院法孫。
野口　幸子　野口之布先生夫人、八十八歳。
石川　謙靜　池上照榮院、本門寺執事長。
三戸　勝亮　二本榎承教寺。
及川　眞能　成子常圓寺、八十四歳ニテ十二年三月廿日寂。
花房　清香　岡山市不受不施妙善寺、十一年十二月十六日寂、七十一歳。
河村　日燈　岡山縣庭瀬不變院、八十六歳。
北越　戒定　福田會理事、常務、北越具戒師徒弟。
金子　慈貞　板橋妙福寺、八十三歳。
金山　日晋　谷中宗林寺、七十九歳。
森本　日霑　上依知妙傳寺。
永田　慈明　貫名達師徒弟、加瀨了源寺。
島田　勝存　比企谷本行院、加藤文雅師弟子。
稻田　海素　二本榎圓眞寺、立正大學日蓮宗史料編纂會委員長。
中里　日勝　赤坂圓通寺、七十九歳。
大平　玄秀　千葉縣教誨師。
末崎　快存　神樂坂善國寺。
中野　海瑛　泊妙輪寺。
大石　養淳　北海道昆布町法華寺。
何　ふみ　何禮之先生息女。
金子　厚山　池上永壽院隱居、元和上徒弟。
渡邊　茂吉　元池上村長、沙彌校世話人。七十六歳

三宅　雪嶺　本名雄次郎、文學博士、代々木初臺。
大内　俊　青巒先生令嗣、陸軍省勤務。
宮崎　隨嚴　品川蓮長寺隱居、七十六歳。
服部　日題　岩本實相寺。七十七歳。
青木　日行　神奈川縣猿ヶ島本立寺。
釋　雲山　名貫隆、藻原寺。(本所本久寺)立正大學書道會講師。昭和十一年五月廿三日寂、六十七歳。
馬場　日深　目黒大教寺、貫名達師關係。
大塚　文亮　大前妙隆寺。
内藤　玄勝　松本龍興寺。
村野　俊光　桐生寂光院。
山本　日偉　菊名妙蓮寺、宗務所長。
石井　耀元　羽田長照寺。
新居　ひさ　大井町新居貞太郎母、和上ノ姪、七十七歳。
新居　たけ　瀧野川田端、新居信四郎母、和上ノ姪、七十二歳。
林　竹次郎　元徒弟、立正大學講師。

逸事集執筆諸家中四師の溘逝に遭ふ、哀痛に堪へず、謹んで弔意を表す

及川眞能師王子院日龍。下總飯高の人。八王子本立寺日津に師事す。明治五年十月より十年六月迄大教院に學ぶ。深川交番學校教師、講義所講師。宮津本妙寺、八王子本立寺、淀橋常圓寺、大正十年五月平賀本土寺。十三年權大僧正、昭和二年本圀寺五十世に晋み、常圓寺に隱栖す。昭和十二年三月二十日寂。壽八十四。宗門能書の一人。書畫を藏すること多し。

神保日慈師字辨靜、祐妙院。相摸足柄村の人。千代蓮華寺辨恭に師事す。池上檀林に入り、卒業の後、中郡曹洞宗中教院に學ぶ。酒匂弘經寺、谷中妙情寺、第一區大檀支林助教。堺妙國寺、淺草幸龍寺より正中山法華經寺百廿二世に晋む。管長大僧正。昭和十二年二月廿二日寂。壽六十九。宗祖眞蹟の蒐集刻成。滿洲國皇帝に謁見し、講法の嚆矢をなす。遂に滿鮮を布教して歸る。

花房雲山師　本名釋貫隆。常專院雲山日我。俗姓は柘植氏、幕臣花房正知の子。本久寺日鮮に投じ、古河本成寺釋貫宙に從ふ。伏木感應寺、古河本成寺、本所本久寺、大野山四十一世、藻原七十八世。昭和十一年九月四日寂。壽六十七。明治三十年水戸小檀林教授。立正大學書道會會長兼講師。性着實淸廉、能く衆を濟ひ、諸多の淨業を成就す。古河塾、錦華學院、普及版御遺文刊行の如きその大なるもの、書道家として名天下に聞ゆ。

花房淸香師學行院日秀。不受不施派妙善寺住職、京都の人。金川妙覺寺釋日解を師とす。龍華教院に學び、東洋大學佛教科、漢文科教育科に歷學し、東洋大學文學士、東洋大學講師となり、京北中學等に教授す。かつて聖祖門下橘香會を創め、盛に各派と連合し、又本化門下夏期講習會を起す。後岡山に歸り龍華に教授し、修養と宗史研究とに沒頭す。昭和十一年十二月六日病を獲、十六日寂。壽七十一。溫厚篤實。學問淵博。しかも發表するを好まず。著述數種のみ。

○

○布達第十九號で各宗管長に一任することになつた頃、薩師は後藤象次郎伯(高輪邸)を訪ね、話の序に、政府が肉食妻帶を奬勵したり、又此度の監督放任などは困るといふことを話されると、伯は、それこそ宗教家が自由に飛躍するを得たので、政權に左右されぬことになつたので、大に悅ぶべきであるといはれた。すると薩師は、それは理想論で、今の佛教者には自主獨立の心が無いから、放り出

され、賴るものが無くなつたら、墮落する一方である。後來の有樣を見て下さいといはれたといふことであつた。その後、明治廿二年爲宗同盟紛擾の際、物部嚴師が伯を訪問した時、伯は此の談話の要領を話されて、いかにも感慨の有樣であつたと、嚴師が龍山に話された。後藤伯は、後に大内青巒居士と、尊皇奉佛大同團結の運動を起されたのである。（龍山記）

○龍門通存師より

過般は、度々御尋に預り失禮仕候。その後、小池德太郎老人三四回相訪候處不在のみにて、御返事も致兼候。○石井耀元師方に昇師の薩師巡廻についての懇狀あるはず○和上書寫の部經（上下二卷）を中野上人より足立師に預けられ、後送還されたとの事。○蒲田御園結社の白縮大旆の事も御記載願度候。草々（十二年五月二日溝口宗隆寺）

○塚木松之助氏より

村田寂順は天台座主、薩和上と親善、明治二十年三月、瀧谷琢宗大内青巒及和上と協議し、各宗の後進に普通學を授けしむ。此事を眞言宗方面より聞及びたることに候。大内青巒が其の人生觀を三四箇條に表現せるものあり。薩上人、雲照、宗演等に示して意見を問ひしもの、これも御存じのことと存候。匆々。（五月二日、板橋練馬南町）

餘　錄

餘錄目次

和上手記三種……一〇八一
宗義鈔等の刻本……一一〇五
熱海唱和集……一一三一
新居文庫記……一一二九

和上手記三種

脇田家古紙堆中より、和上の雜手記三種を獲たり。第一は題して『文句不審記』云云といふ。半紙にて共表紙、總紙數八丁。第二は、表紙なし、題記なし、丁數十七。第三は、表紙あり、題名なし、買物覺えと思はるる數字あり。以下紙數十六枚。いづれも主として教義に關すること、及詩文の草稿なり。

○

第一は題して『文句不審記』「嘉永六丑二月廿一日從」「會九　廣開三下」とあり。半紙、共表紙。總紙數八枚なり。題名によれば、二月廿一日より、文句會本九、廣開三下を講し始め、その不審を記せるもの。表紙を除いて第一紙に、

九四十八ウ 誰論初業能知常耶　彖十三　箋五二十四

十三ヲ文 問菩薩得悟　箋ト雖釋得悟不同。指菩薩爲三權同也不審云偏權井聞三周而得悟箋須爾偏權井至本門而得悟者似不可爾云々彖從ト

二十一ウ 願生至十四生者　此下數處難解

の如く十七條の記載あり。

餘　錄

第二紙には

錄外一上

四ヲ　○飯島津まで六浦の關米　三十七ヲ　○池ノ汀ニツララヰテ

四十一ヲ　○諸宗ノオキロ　或本カキ入云頭本字トアリ

右の如く、一二に於て二十條、三の卷について十六條の記載あり。同異を考校するに似たり。

第三紙表半より一文あり、充洽園記とも稱すべし。

第三紙裏、第四紙表半に亙つて「送惠闇歸東序」の草稿あり、次に詩三首。四紙裏詩數首、五紙六紙表まで詩、六紙裏、八家の文を抄出すること數條。第七紙は表裏に亙りて、池上東之院寶塔記の稿、數條。

○

古語云。聖人之敎。久而成弊矣。敎以聖人之所爲而猶且不能使無弊也。夫維不能使無弊。是以其敎不可一日不明。猶如醫藥不能使人無疾。夫維不能使人無疾。是以治術不可一日不備。此充洽之所以由而築也。敎未嘗有弊也。弊之生也。必萌於偏所修。而成於其所闕。苟充而無以所闕。洽而無以所偏。則弊之何有。

○

釋子惠闇某鄕人也。來于加州園。三年于玆。其學粗通。將從東道以歸舊栖。就予爲別。余曰子將從何路往。曰從東道。曰知之乎。曰否。嘗知之路記而已。且將問其土人而得審。余曰。子未知東道。雖然路記以預知之。土人以隨問之。則至其所至。未嘗妨也。若夫使子路記而已之信。不問其土人。蓋亦危矣。而路記未嘗不實也。夫世間道路淺近易知。猶且不問人以行。則其過已甚。況聖人之道。深遠難到。非復如世間道路。其豈可不隨先覺而質之乎。而先覺之士難得而問。非復如土人之衆且易也。夫路記猶如聖人之書。而土人猶如先覺者。聖人之書。世常在也。先覺非世常在也。學者焉往而質之。聖人之道。不已甚難哉。然而聖人之書非如世之路記而已。書之所存則先覺之所存焉也。世無先覺之士。學士宜師經。經聖人之心也。已得其心。猶其人也。復何傷哉。夫經於聖人之道。已路記。而又土人也。經不亦甚難知。而非其知之難。所以其行之者實難矣。行藉知生。知藉行成。知行雖旣分。所以成其效者。實在於其行也。能用其知。係乎學士之能有其行而已矣。苟無其行。則其知於其人何有哉。子今遠歸故國。已離先覺之師。宜師經以質其行。質其行何也。曰依三軌而已矣。莫復路記而已之信迷於道路。

○

崔嵬百折涉羊腸。峯轉谷回馬蹄忙。險路經危吟思壯。朗吟十里入加陽。
加越能州不越疆。三州馬上可併望。越山能海無限景。山奇水美遠對揚。
甞聞源郎軍此地。一鞭躍馬自奮臂。牛火焦天破西軍。十萬拂地無一騎。千歲但見智勇熾。當時
寧知逐不遂。可憐刻苦自淨急。功業却成他人器。
盛廢到今消不竭。遺恨千歲復何沒。蕉翁空留一石碑。依舊猶哀夢後月。
銀沙一二寸。玉蘂兩三枝。帶雪香愈烈。暎花光益奇。西施更抹粉。太眞未凝脂。不敢近梅處。屐
聲雪恐辭。
氣澄眠不就。飽推紙窓着。滿天雲去盡。萬里月一盤。
孤月團〻照四巒。四巒一白雪漫〻。銀沙瑤臺非塵寰。廣寒宮裏倚玉欄。

賞梅

賞花併喜雪。步月共履霜。凡骨恐違爾。嚼氷立暗香。

月梅

影寒梢杪月。香高月邊風。詩句奈良夜。梅開月正中。

江梅

芳信江南早。寒梅水一涯。花身入時否。妝就鑑清漪。
寒山維約杖。踏雪此幽攀。却被樵人先。薪上插花還。　尋　梅
逢梅奈日暮。乃折水之涯。寒月賞同我。照花俱到家。　折　梅
春風雪後村。籬落數枝開。茅屋爲梅樹。時着問客來。　茅舍梅
乾坤猶凍合。此樹獨回春。昨夜前村雪。惟見一枝新。　早　梅
但喜春風開。寧堪落春風。春風何不定。開落春風中。　落　梅
處々探梅去。歸家全骨清。賞心消不盡。夢繞梅邊行。　夢　梅
高標挿瓶浸。塵心拂地空。眠美連宵夢。香清半畝宮。　瓶　梅

○

世事不一成。任人喚狂客。吟詩鳥驚林。揮筆蛇走席。席間知何有。左右維典籍。沈思或達晨。因
睡時到夕。夕陽沒烘窓。晚閑情彌適。孤禪不堪清。玄論欲對石。頑石絕是非。却憐茅齋僻。四方
十里餘。萬物渾莫逆。無固求顯榮。未知哀落魄。從事山水間。早成烟霞癖。時携顏子瓢。偶試靈
運屐。出門遙眺望。白雲無行迹。

○

與共竹桃立。寧死全歲寒。月淸風冷夜。梅落竹欄干。　落　梅

○

三冬九十日日雪。幻峯拔地庭突凸。庭前積雪高數尋。未及梅花孤秀節。節經萬古神如鐵。歲寒獨立花中哲。臥雪淸晨橫月宵。奇香愈吐愈不滅。三月茅齋鄙吝絕。敢向寧馨懷淺劣。半夜呵氷寫一詩。嚴寒墜指風凜冽。

○

世有將。世無帝。世豈帝是無。世唯無聖制。四海非王土。權臣專政恣。鎭撫百官非王民。恩威賞刑出權臣。

○

稼收閑田鳥聲微。寥〻草人鳥影稀。無稼無鳥田間路。獨往獨來野外暮。暮色蒼然送夕曛。

○

聖人之法。常治之於未爲之先。使其心自知其非而不肯爲。故爲法者不煩。守法者不勞。而民不敢爲亂。

この以下六條略す。詩數首も亦之を略す。

○

大覺世尊。四處道場。皆應起塔供養焉。此經是法身生處得道之場。法輪正體。大涅槃窟也。豈但經卷所住之處乎。若受持讀誦解說書寫。有一於玆。則亦宜起塔供養也。江府一橋御殿大夫人。幷仕女若干名。合志同心。唱題讀誦。經年積功。就中僧某大發護國安民之願。修行最勗。苦修專行。至丁卯。凡五才。淨因所積。首題。自我偈。陀羅尼若干遍。戢以爲千部。其功大成矣。是亦當處卽是道場也。乃大建石浮圖於城西池上東之院。以作卒業標幟也。因開法會以修供養。因祝曰。皇天王土。德澤普洽。吾府君國運永昌。孫葉益滋。內外臣隷。共和同慶。長浴政化。兼願先君累代。祖靈尊位悉潤法利。仕女等輩所志靈魂亦同得妙益。乃至海內所有新古含靈。幽冥普照。妙樂無窮盡。

○（此の前後、本書第一編追錄參照）

嗚呼此經。文文眞佛。字字實相。一句一偈。萬善萬德。無不含容。況全部之多。寧不廣大。況今之千部之太夥。其德無量無邊也。以須彌山以爲墨。滄溟以爲水。豈亦可記耶。遂閣筆。合掌和南唱曰。突兮寶塔。堅石作材。千古風雨。不朽不摧。石乎有時。厄彼劫灰。是此勝因。遂不復灰。

第一冊は以上にて終る。

○第二は、紙數十七枚。第一紙より細字にて文稿を認む。「金龍山記」とも稱すべきに似たり。次に和歌數十首あり、最も珍とすべし。金龍山記中に「甲寅之春」とあれば、嘉永七年卽ち安政元年なること明なり。而して和上年廿五。又後の文中に「請三四月暇。」「而歸省」。「應以二月中旬發」とあれば、和上の神樂坂に歸られしは、安政二年となすべきに似たり。

○

山不高則觀不大。路不險則景不奇。而如其高與險者。人或患之。患之則遊覽者殆少。然則雖名山。人或不知之。不知則其奇景大觀。於山何有。柳子厚云夫（編者曰、紙損ニテ數字ヲ闕失ス。但、柳子ノ邕州馬退山茅亭記ニハ、夫美不自美。因人而彰トアリ）美因人而彰。誠得之。至若其不太高。不太險。面州土之美。可以大觀者。獨金龍山也。山下有一小廬。名曰妙玄庵。庵主年之春秋。設宴請日輝上人。上人與其徒遊山。比年以例。蓋由此也。甲寅之春。有事偶闕。夏四月一日。其庵居者。來告云。蹴躅花開。衆山可喜。雖上人不遊。吾子與其同袍。盍往一遊焉。山靈恐亦有遲歟。於是。（編者曰。蹴字蓋躑字之矢）

○

加陽域東南多名山。而峯高道遠。或道不太遠。崖谷險隘。一里百折。殆不可步。況嚴冬深雪。輔以爲害。四時但夏則得以登。然炎天赫日。亦爲之患。是以人罕能至。遂雖有其美。至無知之。

○

金龍山西與加陽城。相距半里近。渡麻水。過臥龍山。一步逐一步。景狀百變。漸入佳境。忘足之頻進。惜峯之已至。左右前後。各數十步。無一箇小樹可入目者。童而高。兀然而一赭峯者。是金龍山之頂也。從此南且東皆大山多奇。或有三峯宛然自爲山字形者。或一峯橫立。或列或聳。或遠或近。聳如天柱。列如屏障。遠如凝黛。近如牆藩。或廻或拔。或奔或伏。羣峯累積。亘數十里。交越能之界。其際有雲烟霞靄之聚散。有松杉楓楡之紛錯。有怪巖之怒臨斷崖。有奇禽鳴苔椎歌。指顧無暇。形狀不一。北有湖水。長三四里。沿山斜者曰何湖。又北距山一里餘。有海渺渺乎。幾千萬里。布帆若干。有西者。有東者。有收帆而泊者。有下網而漁者。沿其海有一聚落。漁商數千家。曰宮腰。是四方商舟之湊也。北從海。南到山。而西沃野千里。阡陌縱橫。其際有耕者。耘者。疏溝者。治畝者。杖耒而立者。提餉而來者。牽馬而往者。歸者。驅牛而倒騎者。橫騎者。農事之盛。民役之勤。皆可以見。其西近瞰山下。金府十萬家。一瞬而粗可盡。嗚呼州土之美。可以大觀者。夫唯此山得之。（編者曰。假ニ前ノ文ト接續セシムレバ）山下有一小庵。名曰妙玄庵。庵主年之春秋。設宴請日輝上人。上人與其徒遊。比年爲例。蓋由此也。甲寅之春。有事偶闕。夏四月一日。其庵居者。來告云。

蹴躅花開。衆山可喜。雖上人不遊。吾子與其同袍。盍往一遊焉。山靈恐亦有遲歟。（編者曰、次ニ接スベキニ似ル）

○

余答曰。寧使山靈負吾。可使吾負山靈耶。乃欲奮而從。而□□不果。豈得不鬱然於懷。因憶昔日之遊。聊記其山狀而以擬遊。

○

金城之東。過一錢橋。沿麻水之岸。倚臥龍山之阻。隨地昂低。挾坂參差締廬六簷。在其最高處者。曰妙玄庵。皆遊觀之佳勝者也。而此庵最善。不動一步。環堵之中。瞪目而視。則山水之奇。城郭之隆。霏烟杳靄。消抹其上。溪聲鳥語。紛錯其際。

遊白山社看蹴躅記

午時飯罷。友生五人携茶筐出立像寺。折右二百步。到寶集律寺。入門徘徊。濟濟堂宇。竹樹交環。蕭然佳境。使人肅然。既而出門。傍寺左折。竹篁挾路。行二十步許。下一石坂。出田間。到犀水。時是四月。遠山雪解。溪流方漲。溶々乎。水色如碧油。清澄可弄。則以舟渡。予顧舟子。問蹴躅所在。舟子顧向東方指一塢。乃登岸。隄上右行。未幾遇許多蠻童。頂薪來。乃問地名。如不解。笑而過。予亦不再。過小橋。望舟子所指之塢。傍川而進。百步許。入木華表。一殿孑然倚岸起。是白山社也。庭際可十許步。數藤蔽之。地名藤架者。蓋以此也。殿右施一衡門。門中羅胡牀。鋪草筵以誘客。更又設小門。是社之後園也。園之廣。纔數丈。植樹爲籬。蹴躅十許株。列植而交枝。慮風雨爲祟。以紙障蔭之。其尤者二株。高一丈餘。其餘皆減三分之一。亦異常。其花小而繁。殆不可見枝。望之。如火雲起勃林際也。璀璨奪目。乃欲開茶具小憩。而遊人紛錯。無地占坐。踟躕樹邊。久之遂去。同遊五人。既歸賦詩。予獨不成。因聊記。

○

一家之語。爲是台家。爲是當家。

小子妄記此論。初竊妄謂。此疑元唯在本宗之理上耳也。不同其對台宗辨同異。然則論本迹境智之論。雖台當俱有。既宗異家別。所立之義。亦天地也。今在其宗稱一家。豈有濫台家之義矣。又妄謂。其云當家云一家。雖其所指同而義小異也。當家者。或簡台家指自家。或專指自家。雖有二義。而語自初義似親。一家者。但就自家而言之辭。非揀餘。今既已非對台家之義。故用此語。妄語如此。伏乞垂誨。

○

問者其當問當家評論之本迹致劣之尅義。

小弟設此疑問。蓋有由矣。根綱要。發正議。成本迹日月燈。

○

屢侵高覽宜愧已。頻勞毛穎爲思君。思君則是非他趣。（已下闕文）

生乎有命豈容私。强索亦愚棄亦癡。嘉也至愚爲君惑。溫涼飲食宜擇之。

處死待死恨何有。只如志業未成何。志業未成猶可也。負恩棄信悔應多。

○

可怪杜鵑心跡違。年年空叫不如歸。百千縱說鄕情盡。何若鄕園一奮飛。

○

夢さめて跡も絶えてししきたへの枕にのこる露の白玉

はてしなき武藏のはらをふみわけて通ふ夢路に夜は明にけり

うつ木吹風にやつてん子規けふ來鳴すは花は散ぬと

待子規をよみて貞溫師におくる

○

驟雨晴來正落暉。梧桐葉動晚風微。坐間未覺炎威減。絡緯一聲已促機。

晚間驟雨破蚊圍。殘滴聲々暑減威。籬畔追涼檢庭草。牽牛箇々蕾初肥。

○

寥々林下一寒生。孤陋深憐違伯兄。切琢可欽多益友。推敲久缺奈詩盟。

推敲一字詩檀益。切琢千銖學士聲。

いつしかも月日ははやく過ぬるとしれとおとろくけふにそあるかな

君不歸來我不行。論場詩席日堪情。北窓若有讎書暇。着意應聞杜宇聲。

○

さと遠く塵たにとめぬ山家には心とすめる水ぞ流るる

明方の空定なき世なりとも鳴け時鳥きかまくほしき

今よりは行かふ人もまよいなん日ごとにまさる野への夏草

夕立の露やまつらし日さかりにいととしをるる野への草村

此の後絶句二首和歌十七首あり。和歌は、此に記するものの外、尙九十二首ありたれども略せり。又詩十數首、之を略す。

納　涼

奇峯稍頽月初絃。兩岸風微旋翠烟。江上晚來無午熱。漁商好散納涼船。

萩移水

舟人も棹さしかねてしはしたたなかめて過る水そこのはさ
水底に移れる荻は舟人も棹さしかねて見つつこゆらん

○

好時自惜違吾兄。春去夏來夏亦更。禪榻詩床與誰共。窗風梁月屢將迎。若無負笈尋師計。必作歸鄉拜墓行。況是萱堂算日待。吟筇莫住武東城。

地をちちむてたてなけねばいかにせん思ひはてぬ東路の空

○

風吹けば琴のしらべも高砂の松にかかれる月のさやけさ
物思ふ今夜の床の露けさにいつしか蟲の枕とふ聲
枕とふ聲ぞさやけさすゞ蟲にまたもさめゆくふる里の夢
夢たへてねむれぬまゝに枕とふ蟲は今夜のなぐさめの友

旅中山

初旅のこし路はまたもしら山を雲のはるかに見てたとるらし
雲たちし越の山路のけはしさも古里見んとかつたのみ行

○

壽量文上直に迹と云へしや
答本門既に二箇ありて文上は迹家所弘の經體と定寸は一往文上は迹に屬すべし

夜雨寫情

更鐘響遠寺。點滴落荒除。人定夜窓靜。虫鳴素屏虛。歸愁和雨密。鄉信共詩疎。屢拭交頤淚。深憐離膝居。照恨燈頻結。寫情言自餘。八行舒又卷。難封奉母書。

○

樵廬知何處。夏木綠重々。天際雲晴盡。米家第一峰。

○

貞溫高座見惠敎劉因賦長句以代復書

鴻鴈秋來忽喜聞。含香一朶帶烏雲。行行可感交情厚。字字深羞禮意勤。謝劉將裁書偏苦。離懷欲布奈無文。此中心緒誰因訴。獨對前窓送夕曛。

○

病中不堪無聊。信手抽卷。得楊誠齊詩集讀過數紙。忽到病中作。頗有所思。因拾其韻。而得數首。

異鄉臥病亦誰憐。困睡易驚還易眠。爐底自添烏炭得。于時復起藥鐺烟。

病臥鎖窓忘雨晴。好晴空過不心平。枕邊披卷氣愈憊。却聽隣房講讀聲。

抱痾莫損後凋心。倦腕披書奈叵禁。雖病且愚年幸富。向來意氣勵宜深。

○

綠竹千竿直且森。非村非市別爲林。

○

雲自在灯王佛。表ニ觀心佛一也。雲自在心之解脫德也。灯者心之般若德也。王者法身德也。佛者己心卽三德具足。故曰ニ之於佛一也。雲自在。隱顯自在常德。離合自在我德。統攝自在樂德。色相自在淨德。

○

二千億佛。千億佛者曰无量也。二者曰自行化他也。

○

春山如笑翠松交。遠近無看不落霞。我亦一瓢挑杖云。嶺南試欲摘蕨芽。

○

柳下人家六月凉。欄前水滿芰荷香。九翁薄暮知何處。童指青烟鷗外航。

樵廬知何處。夏木綠重々。山際雲晴盡。分明米點峯。

編者曰。此詩重記。數字修正。推敲ニ勞スルヲ見ル。

晦跡扁舟老綠湖。垂綸長謂世緣無。何知我避世緣處。却落人間爲畫圖。

木落蘆枯冷潮痕。兩三蟹屋不成村。漁郎上市歸猶未。魚網閑乾返照垣。

與某書〔編者假ニ題ヲ設ク〕

不承高敎。旣已累月。宜奉書以受敎。因循。前却致反蒙慈敎。意厚禮勤。宜如何報。報之未果。又辱芳問。感愧益深。欲卽裁書。遷延越年。無禮失狀。無辭可啓。尙强顏云云。雖甚似文己之怠慢之過。實由頑愚。不知所言。筆不能下。吾子幸憐恕之。比來早春寒甚。伏惟起居輕利。道體萬福。

先書云。被留舊知。不得卽歸。將及春。小子讀之。宵然如喪。久之自慰。古人云。三日不見。鄙吝已生。三日睽濶。尙如是。況半于年。況如小子。言行日失月亡。苟非吾兄扶持。不能自樹立耶。然吾兄今年卽歸。明年又往。千里行程。動兼三月。則自戕〻他。未爲無失矣。又貧生有路費之慮。是所以先如喪久之慰也。再書云。由南庠移北庠。潛爲學頭慈敎師。講本尊抄。又比來見諸生推許。將開講習。是以歸期及秋。或將留滯二三年。小子忽聞之。甚惑矣。旣而喜且欲賀矣。其如前宵然有喪者。朋友之情也。其今甚惑者。朋友之道也。情則私也。闕略猶可。道則公也。不得苟不辨矣。吾兄往日。違嚴師命。潛隨輝尊於加陽。遂失歡於嚴師也。年已久矣。而吾兄又甚憂之。時〻與人談。每及於斯。又以嚴師甚老。遂不可遺罪於高恩之地。去年春往南總入庠。而嚴師之怒少解。其往南庠而嚴師之怒少解。則其去南庠也。非嚴師之意。不察而可知。非嚴師之意。則其罪遂不可解也。亦可知也。況此擧。吾子獨斷。不計叔父師。恐亦失歡於叔父師。苟薄叔父之歡。則厚嚴師之怒也。伏惟吾兄甚壯。嚴師甚老。吾兄立功之日多。嚴師爲歡之年少。解嚴師之怒。而後計叔父師。竢二三年爲之。未失也。所以小子甚惑矣。又吾兄讀書孜孜。當一刻千金之時。不遠千里而遊南庠。其曠日月幾許。廢其書。費其財。又幾許。不可言少矣。而不顧者。豈非爲嚴師甚老哉。吾兄曩時有兄。不幸今則亡矣。承嚴師後者。惟吾兄耳。今嚴師已老矣。雖不能在其側養其身。宜在天涯養其志也。私心竊謂。是吾兄今之志也。旣而又謂。緇門之衰。未有如今日甚也。庠序之學。弛廢之所致也。苟有意於守道者。無不有憂於斯。然則安知嚴師之憂。亦不在於斯乎。一人之心者。千萬人之心也。嚴師獨豈異乎。夫意其必有憂於斯。而我隨之。是孝之至也。今吾兄入南庠。開講筵。鼓衆趣道。將以奮此衰廢。然則或嚴師怒。庶幾解歟。或有少違其意。未可痛矣。古有成父志者。魯隱公是也。而穀梁子毀之。謂其父有克邪之心。而子不能揚其美。吾兄旣成其大志。可謂成師之美者。亦何害於孝哉。今意。但世出異耳。而世出於道何有。關氏之門。雖長材俊足不乏。未有以選入北庠者。今吾兄獨以俊材。見諸生推許。不求而得。擧關氏之門於庠序。由吾兄始。夫庠序者。天下學士之所會也。若得開講於此。何唯一庠而已。遂觀關氏之學之。大行于天下。吾兄勉乎哉。是小子所以賀也。見示桓琳學士之詩。清灑可愛。且令小子和之。不才何當。然他日因此。得交其人。未可知也。故不辭。敢涴高韻。而呈座右。若有可采。請正之以示學士。唯吾兄命耳。大雪作嚴。又聊見北土風而已。爲法萬々自重。

○（編者曰。下文蓋似可接入前文中。但其聯絡甚不明）

吾子又憂歸期甚遷延。是固可然。不獨吾兄之所憂。抑亦小子之所眷々也。然吾子之事。已如前陳。苟益於道。何痛於斯。夫業者可忽而成之哉。若其速成。則其績不可冀矣。培其根。固其基。以

領其衆。遂有翕然而化。吾兄若出入庠序。則業或破。譬之世將動而卒離。二三年而歸。或可也。比從武州。得（編者曰。比得ノ下、小子師大車運ノ字アリテ塗抹シ比得ノ間ニ從武州ノ三字ヲ加ヘタリ。）命歸省老母之書。件々情切。不可以止。然小子固有今年歸省之意。未待此書也。惟以吾兄未歸。不發而已。今也吾兄之歸。未可必矣。歸省亦不可闕矣。欲請三四月暇於輝尊。而以歸省。應以二月中旬發。五月而歸。

編者曰。右二件は、清谷上人に關するらしく見ゆ。本集詩篇附錄中の清谷上人の與文嘉師書と見合はすべし。

○

萬卷堆中托此身。人間榮辱總風塵。一年畢竟雖如是。十事視來五尙辛。
千般人事不關身。獨與梅花酌麴塵。詩債欲償材不足。無人復解我酸辛。
無德無功土木身。一年又愧老風塵。人間樂事知多少。十箇檢來九苦辛。
烟花雪月苦吟身。筆硯深羞數委塵。一年詩債償無術。我亦今宵奈苦辛。

○○
第三は表紙を有す。表紙とも合十七枚。表表紙には、「灰ふるひ」、「あみ」、「利金」、「藥」、「ろふそく」と横列に覺えがきあり。裏表紙に落書樣の字あり。

內容は、大體、本遺稿中に集錄せる詩文の草稿にて、先づ「飯高法喜堂」の詩より始まり、詩九首。次に佐藤一齋の文を載す。又詩五首あり。次に作文題と思はるるものあり、本紙三丁。

讀吾書樓記　適可山房記　題法喜堂　書蓼園讌集圖　送惠間歸關東序　送人入學舍序
義忍說　西行望嶽圖　齋藤實盛染髮圖

とあり。次に唐人の一文を記す。その末尾記して曰く、「九月十五日暗書　顚倒二處脫字七字誤字八字」。其次、「讀孟子」の稿あり。次に蘇軾の文あり、尾記に曰く「九月十六日夜暗書書誤二字誤字三字衍字二字」。文中、朱を以て正し書せるを見る。次に「快哉亭記」前半あり、尾に曰く、「十七日暗書衍字一字」。次にその後半あり、尾記なし。文中往々朱又は墨を加ふ。

次に、本集中に錄せる文四篇あり、次に詩あり、次に「芝山記」の稿あり、次に、九丁の裏より十一丁表四行まで「妙音菩薩のこと」十一丁表五行目より十一丁裏二行まで「藥王のこと」の書下し文二篇あり。引續きて又詩あり、次に傳略二文あり。此の帳これにて終る、十二枚目表なり。十二枚裏と十三枚表と白紙なり、十三枚裏に細字にて、「善國寺住職推而相願候事同寺住職之器に無之事は」とあり。暗示せらるるものあるべきに似たり。その十三枚裏十四枚

表全體に渡り、大書して曰く、「埋月寐雲堆又堆。半宵纔是洩光來。聳肩病衲坐風露。自笑吟情尙未灰」。「中秋のさく」。これ和上にあらざるべし。十四裏句二首。十五表、池内大學の新年の詩。十五裏十六表へ一杯に七律あり。十六裏にいはく、「右賴三樹幽囚中之作」これらも和上の筆にあらず。

以下、多少第三の分より拔き書きす。

十月十五日至如山軒偶小飲酒酣座有泰靜君者將歸甲陽君以臺才杯字索送別詩座皆有詩余已至此獨不得不吟也乃賦之字盡而意未畢因又加數字以成篇

甲國知何處。送君高上臺。道衰終乏德。友少益懷才。殘燭昏垂淚。離筵慘舉杯。他時各天外。風雨引餘哀。（尙、本集中に錄せる一詩あり）

齋藤實盛染髮圖

金甲紅鎧赤錦衣。霜刀如電馬雄飛。鬢髮雲亂目眦裂。三軍孰敢見衰微。愧無老容輝陣頭。故將膏漆染華髮。忠勇至死不嘗撓。英名傳今人奮發。

○

竺乾分架冊成堆。堅壽迎風細扇開。涉獵愧吾怠懶甚。紙間幾箇皁蟲來。

蓊鬱青山清冷水。籠舟下網芦花裏。歸來共婦呼杯醉。三尺鱸魚四鰓美。

檐馬嘶風聲送涼。晚間稍寬退炎陽。哀蛩上壁蚊三舍。白露橫雲月一方。

○

遶屋松杉合。晴嵐翠滴衣。煎泉茶更冽。咏月意愈微。往事眞多悔。餘生欲莫譏。漸知兼世忘。蛛網鎖柴扉。

○

眞淨院日法聖人者。伊豆小土肥勝呂利右工門長男。出家薙髮。師事敎尊者。初入飯高庠學。本庠功滿。將赴京庠請。因病不果。及尊者主兩山。師盡心侍給。後拜役者。預聞樞務。以終萬尊者時。前後十數年。其功亦多矣。師爲人嚴重。有志操。性甚多病。嘗住鎌倉常榮寺云。遂寂永壽院。時年四十二。實天保十一庚子五月廿六日也。葬院之先塋側。

○

持成院日具聖人者。越後柿崎人。姓平野。早有出塵志。父以其長子不許。師亦不敢違。後一旦有感。遂潛出家。從敎尊者于池上。落飾未幾。住永壽院。師謹厚廉直。善書數。熟產計。會本山會計誤算。令師督之。簿書正。出納當。遂令師領金穀計。以功賜紫袈裟。爲院于永聖行。累拜役者。歷

數代。師兄日法。遇師甚嚴。每法病。使師視飲藥。師保養曲盡。及法寂。買田于上池上村。及金八十圓附院。永資香燈。以充相續資。師在院十七年。轉妙典寺。後住比企谷本行院。初祖山用度乏闕。教尊者患之。及師監山。刻苦率儉。財穀漸足。蓋潛奉遺意也。師監山二十二年。明治三年己巳三月廿七日。以病寂。年六十七才。分骨合葬日法塋。師書曼荼羅許多。不知其數。人爭藏之云。

以上を以て、此の稿を終ふべし。而して、此の文を讀まむ人は、先哲の努力刻苦、克明に修業したる跡、責善相益の道を見て、深く感悟せらるるべきを信ず。（五月十日古溪記）

（編者曰。本篇は劉記草稿なり。讀み易からしめんが爲、敢て句讀を附し、或は濁符を點し、多少誤字を改めたり。恐懼甚し）

宗義鈔等の刻本

日薩和上は、神樂坂大車院上人の弟子で、加賀優陀那和上の學徒である。その平生の志願は自ら著述をなされず、偏に優陀那老和上の遺稿を整理出版し、これによつて宗門的教育事業を行はんとなされたのである。この出版の事業中、忘れてはならぬ人は、優陀那和上の甥野口之布先生である。先生と日薩和上とは同甲子で、充洽園での同學である。薩和上は、安政二、廿六歳で歸府。白山蓮久寺で、學徒を教授された。此の頃、もう日輝和上著述の校訂を始められたと思はれる。先生は維新後上京。終に共に校訂事業に從事せられた。南谷で出版されたのが初であるが、後は小笠原東陽先生も版下を手傳はれたといふことである。

薩和上の教育事業は金澤での、會頭や代講は別として、その最初のものは鷄溪精舍であらう（白山蓮久寺）。それから飯高、それから池上の南谷檀林、それから宗教院、大教院。等となるのである。南谷檀林は、舊くからあつたが餘り盛んでなかつた。それを隆興することにして、その隣の妙教庵（法緣寺で住職を置かぬ寺）にはひられた。南谷は講堂だけあり、庫裡は照榮院（學頭の寺）である。講堂が卽ち「立善講寺」である。（講堂は後長く形を殘してゐたが、明治十七年秋の暴風で潰れてしまつた。立善講寺の名は、志木町へ移つた）。こゝで徒を集め

て教授せられた。こゝに止妙院師(永野日定)守本文靜師、磯野日筵師、石川惺亮師等が教を受けられた。小笠原東陽先生も來られた。東陽先生が南谷に連れて來られたのは、明治元年戊辰六月で、羽鳥へ去られる明治五年壬申春まで教授してをられた。

此の慶應より明治改元へかけて天下亂離の時に、早くも此等の教育事業に骨を折られたことは、いかにも宗教家らしい先見卓識で、實に偉いことである。公刊本の奥に飯高檀林何何藏板などとあるのは鑑師その他出資の記である。

明治三年になると、先づ『壽量品宗義鈔』上下が刊行された。後に合本一冊となる。

「明治三年庚午冬刊。弟子文嘉日薩校訂」としてある。跋には「先師嘗自經尾。逆次逐品鈔解。纔至涌出。會病而化。雖功未畢。本門已備。若不偶然者。云云。弟子立善講寺沙門文嘉識于容月廬。明治庚午冬。佛成道日。」とある。

次に『神力品宗義鈔』『囑累品宗義鈔』は合冊で、囑累品の末に、

「明治四年辛未秋刊。弟子文嘉日薩校訂」

とあり、その欄外耳格に「飯高教林、松和軒藏梓」とし、跋には、

鈔凡十七卷。余嘗欲梓之。而力微未能。其解壽量神力。義尤著明。甚有益於學者。故前刻壽量。課之初蒙。自厚誠研喜之。自頒貲。又謀之同好。梓神囑兩品。使余校訂。云云。明治五年歳次壬申春正月自恣日。後越海岸沙門文嘉日薩。誌于容月廬。

とある。薩和上は四年九月、柏崎妙行寺住職入山せられたのである。尤も名前だけといふことである。此の出版に多大の費用のかかることは當然であるが、まづ自厚院誠研日鑑上人の寄附が最初にあつた。(内山妙廣寺住で、徒を集めて講授し、又飯高に講授した。但し飯高は檀林の舊制をやめたから、教林といふ)それから引續いて、寄附をするものが出て來た。飯高の松和軒向城菴等の名が見える。そして次々に出資者の名を並べて刻してある。

次に、『常不輕品宗義鈔』。

「明治八年二月　久遠寺沙門文嘉日薩校訂」

「東京府下第二大區芝三田

蓮乘寺沙門大須賀日梁貲刻」

とある。已に身延へ晉山である。(明治七年三月三日發令其五月十九日入山)

藏板處について、「池上南谷學室藏」とあるのが最初で、それから「日蓮宗大教院藏板」となり、更に「大檀林藏版」となつた。最初のには、見返しに「優陀那日輝和上撰。宗義鈔。池上

南谷學室藏」とある。そして壽量品の卷下の最後の紙の欄外耳格には「剞劂　唐澤長造」と書いてある。板を彫つた人の名を書くのは之を重んじたのである。本文に誤なき證左とする。

『普門品、陀羅尼品』は、

「明治十一年第二月　弟子　祖山嗣法文嘉日薩校訂
大垣　常隆寺住職　常日靜貲刻」

『嚴王品、勸發品』は「明治十一年第三月刻成。」貲刻者は右の常日靜師である。

『分別品』は

「明治十一年十月刻成。
弟子　祖山嗣法　文嘉日薩校訂
東京　一乘寺　五十嵐寶俊
本光寺　鈴木日道　貲刻

『隨喜品』『六根品』は合冊、「明治十一年十二月刻成」。「弟子祖山嗣法文嘉日薩校訂」。「東京本立院主江上勝義貲刻」とある。

『藥王品』は、「明治十二年第一月刻成。弟子祖山嗣法文嘉日薩校訂。敦賀妙顯寺主平賀日晉貲刻」。

『妙音品』は、「明治十二年八月刻成。弟子祖山嗣法文嘉日薩校訂。同、光山嗣法淵清日脩貲刻」。

『涌出品』は、「明治十三年二月刻成。弟子文嘉日薩校訂」。貲刻者の記名はない。

以上で、宗義鈔の開板は、明治三年から始めて、十餘年の年月を費し、多大の勞苦を積んで出來たものであることがわかつた。日薩上人の多大の御骨折も察せられるが、校訂を共にせられた之布先生の骨折も察せられる。日鑑師が最初の貲刻、日修上人が最後の貲刻であることも、深い因緣といふ感がする。又多數の援助者が此の大事業の爲に貲を惜まなかつたことも尊いことである。その貲刻者たちの、善を成就せしめ德を積ましめる芳志も、深く感謝せざるを得ぬのである。我々が宗義鈔を讀むに方りて、深く先哲たちの骨折に御禮申さねばならぬ次第である。又、版下を書いた人々にも、御禮申さねばならぬ。今日では、いたづらがきに過ぎぬものでも、活版によつて誌に出で、書ともなつて天下を易易と横行する。それにつけても、この木版開雕が非常な骨折であつたことを考へなければならぬ。これが今の諸君た

ちの父祖の大教院、大檀林時代の教科書であつたのである。諸君も志を起して一讀再讀せられんことを希望する。此の版木の現在狀況は私はまだ知らぬのである。多分、宗務院に幾分は殘つてをり、その他は震災に會つたものと思ふ。なほ、十三年頃、一通り體裁を整へて纏めて出したものは、日本橋の光玉堂長野龜七が製本發賣所で、東京の千鍾房(須原屋)、京都の平樂寺(村上)、大阪の松根堂(吉田)が發行書肆となつてゐる。ついでに十三年頃のそれぞれの定價を記して見ると、次の如くである。壽量品二十五錢、神囑品十錢、常不輕品十錢、普門陀羅尼品二十錢、嚴王勸發品二十錢、分別品十錢、隨喜六根品二十錢、藥王品二十錢、妙音品二十錢、涌出品二十五錢。

次に宗義抄已外の刻本について一瞥する。

『弘經要義』といふのは「南谷學室」で版行した最初のものかと思ふ。これも木版である。私の處にあるのは、題簽に「弘經要義。附宗義錄。單」と書いてある。見返しには、「優陀那日輝和上述。弘經要義。池上南谷學室藏梓」とある。此の題簽も見返しの字も池上日運上人ではないかと思はれる。

「後記」に、

上毛桐生新居善兵衞捨貲。敬刻先師日輝和上述弘經要義一卷。所冀慈父是法院能養日眞法師。悲母法性院妙眞日養法尼。乃至六親法界。同入甘露之門。俱證菩提之道。

明治三年庚午春弟子立善講寺沙門文嘉謹校訂

とある。この字は守本文靜上人の筆と思はれる。附錄に刻してある『宗義錄』の後記には、

新居氏施貲。刻此宗義錄。以薦眞淨院大法日道。昇林院貞了日覺。善證院法輪日明。三靈菩提。乃至六親法界。平等普潤。

明治三年庚午秋　弟子　立善講寺文嘉日薩校

とある。眞淨院は長兄繁太郎、昇林院は第三兄覺三郎、善證院は第四兄幸五郎のことである。さて此の本の後刷本には、更に『宗門大意』を加へて、三卷合刻としてある。題簽には『弘經要義附宗義錄宗門大意』とある。その『宗門大意』の後記には、

庚午之冬。錄寺朗惺日因。奉本門寺僧統命。赴上總。提警廢學。日因薦學士戒靜爲副。往集一州僧衆。曉諭勸勵。仍於妙泉寺。令戒靜首講此章。云云。

『充洽園禮誦儀記』これも早い方である。「維時明治三年龍集庚午秋八月。弟子立善講寺沙門文嘉日薩校訂」と後記がある。見返しには上部に「充洽園」と横書して、下中央に「禮誦儀記」

と大書し、右に「優陀那日輝和上著」。左に、「池上學室藏梓」とある。これが宗門の儀式の整頓されたもとで、その標準となつたものである。儀式の意義が明にされてをる。若き諸君は、此を熟讀して儀式の精神、儀式に宿れる宗教を體得せらるべきである。

『放生慈濟法會本』『施餓鬼法會儀』、『附朝昏禮誦式』以上折本合卷。「明治四年辛未仲春弟子文嘉盥嗽謹識」と跋語がある。そして、貲刻の因緣が書いてある。

「上毛桐生新居氏。施貲刻此放生會文。冀慈父是法院能養日眞。悲母法性院妙眞日養兩靈。遊寂光之樂邦。履菩提之覺道。」

『施餓鬼儀』の奥には

「申歳女性以所受寄幹主之餘貲。刻此施食文一卷。以擬某祈禱菩提兩願。因祈施食妙善。感長壽之顯果。拔苦福因。得增道之妙樂。」

とある。申歳女性とは、今分りかねる。

『妙宗本尊略辨』。「明治四年辛未冬刊。弟子文嘉日薩校訂」。「下總飯高學室藏」とある。

又『本尊略辨附錄』には、「明治五年壬申春刊。弟子文嘉日薩校訂」。別に「飯高教林向城菴藏梓」と記してある。

『觀心本尊抄略要』。「明治十年上梓」とある。「弟子正嫡嗣法文嘉日薩校訂。勢州四日市水谷五郎九貲刻」。「東京芝宗教院藏」である。奥付には「大檀林」とある。後の製本である。見返しに色紙が用ゐてあるのは古い刷らしい。

次に『祈禱肝文鈔』上下。「明治十一年一月上梓」とあり、「弟子祖山嗣法沙門日薩校訂」『東京本立院主江上勝義貲刻」とある。見返しには「優陀那日輝和尚述。祈禱肝文鈔上下。東京宗教院藏」とある。奥付には、「日蓮宗大教院藏版」とある。宗教院は、明治五年から暫らくの間、後の大教院の前身たる名前であつた。私の藏する本は、大教院となつた後の製本と見える。

『本迹歸宗論』。これは少し風がちがつて、「教師少教正三村日修校訂大阪府下日蓮宗中教院藏版」で、次に貲刻者の列名があり、奥付は次の通りになつてをる。

明治十二年一月二十日出版御屆

同年　三月　出版

著述　故人　優陀那日輝

出版人　群馬縣平民　新居日薩　芝區貳本榎一丁目拾八番地

貲刻者は次の通りである。

貲刻列名　大阪府下蓮光寺住職犬飼日完
同　本宗教導取締中
同　本宗教院事務課中
攝津能勢郡本宗十五箇寺中
播磨國姫路法華寺住職橋葉日淨
同　圓光寺住職滋野日進
但馬國　本宗寺院中
攝津島上郡梶原村安穩寺金子壽政
同　上牧村本澄寺蔭山日榮
大阪府下妙光寺住職　福岡日體
同　中教院生徒　吉田珖圓

『題目抄　因果抄』合刻一卷、
『觀心本尊抄立正觀鈔十法界鈔』三書合刻一冊、

明治十二年六月刻成頒行。『祖書要津』の條往見。
『首題要義』は「明治十二年十月刻成」であり、
弟子　祖山嗣法文嘉日薩　同校
姪　石川縣　野口之布
下總妙勝寺住木村日到貲刻。
とある。大教院藏版である。
『改正訓點妙法蓮華經』一部八卷
明治十三年五月廿三日御屆
同　年九月刻成
日蓮宗大教院藏版
改正訓點人　群馬縣平民　大教正新居日薩
貲　刻　同縣下前橋紺屋町　岩崎作太郎
大教院出版圖籍賣捌所
北畠千鍾房　須原屋茂兵衛
日本橋區通一丁目十五番地

右定價は二十四年頃の日宗新報によれば、金三拾錢とある。

『祖書綱要正義』乾卷「明治十四年五月刻成」

弟子　祖山嗣法文嘉日薩　同校
姪　石川縣　野口之布　同校
加州　立像寺前住澤田日敬　貲刻

「日蓮宗大檀林藏版」である。

「坤卷」は明治三十二年に守本文靜小林是純同校で、京都村上から出板。

『祖書要津』上中下三卷。これは本妙日臨律師の錄内外より選定編纂せられたる所謂「十部祖書」を、校訂出版せられたので、題名は此の通りにかへられた。大教院では初級より上級へ、上卷中卷下卷と進んで講解した。その爲の課本である。而して、此の本は分冊制度で出版されたらしく、最初には題目抄因果鈔。合刻一卷。十年頃か。次に本尊抄。十法界抄。立正觀抄。これは三書合本の體裁で十二年に出てゐる。それから次第に繼ぎ足して、十四年七月にまとまつて、屆出になつたのである。本文は清朝體、十行二十三字といふ體裁である。

奥付は次の通り。

明治十四年七月　四　日御屆
同　　年七月廿五日出版

故　人　本妙日臨律師編纂
群馬縣平民　大教正新居日薩校訂
芝區二本坂壹丁目十八番地（坂ハ榎ノ誤）
承教寺寄留
日蓮宗大教院藏版
同　所

しかるに又、「七月四日御屆」で「八月出版」、「群馬縣平民新居日薩校訂、日蓮宗大檀林藏版」とした本もある。この本では、「製本賣捌所須原屋茂兵衞」で、四軒の賣捌所が名を列ねてゐる。この『祖書要津』の外に『法華十部書』といふ版も、毘尼薩台巖校訂で、村上から出てをる。十二年十二月刻成である。毘尼薩師も優陀那門である。

『充洽園叢書』題僉に「一」としたものが一冊あるのであるが、實際刊行されたものは、これ以外にはなかつたであらうと思はれる。表紙見返しには「新居日薩編纂」又「大教院藏版」とあり、本文は雙照談（二觀精要篇、事觀修相篇）、事觀眞實義、事觀略議、事觀略伽陀、を集め收

めてある。事觀略伽陀の末丁は、次の如くになつてゐる。

弟子　祖山嗣法文嘉日薩　編纂
博多　勝立寺前住新野日明　貲刻
同　法性寺住職安正日堯

事觀略伽陀　明治十四年八月校訂刻成

「充洽園全集」の方では、各篇の後に「新居日薩校訂」とあるが、叢書の本文にはない。

『法華觀心讃』。跋は薩和上御自身のもの。奥付には

明治十五年三月廿七日御屆
同　年四月十七日出版
故人　優陀那日輝　述
群馬縣平民　大教正新居日薩校訂
芝區二本榎壹丁目十八番地
日蓮宗大教院藏版
同所

となつてをる。本文は清朝體、十行二十三字。製本賣捌所は、やはり須原屋で、五軒の賣捌所がある。

『一念三千論』。これには薩和上の序文があり、「弟子文嘉日薩姪野口之布同校」と後記がある。「明治十五年十二月八日版權免許明治十八年八月出版」である。序文の日付は「明治十八年三月廿三日弟子本化傳燈比丘文嘉日薩識」となつてをる。活版である。出版人は奥付によると、「千葉縣平民、中村茂太郎、麴町區有樂町二丁目三番地」であり、又見返しには「中村藏版」となつてゐる。當時の雜誌記事及廣告で見ると、深川明進社から出されたらしい。

『妙宗本尊辯』は「明治十七年十一月十四日御屆明治十七年十二月出版」である。

「弟子文嘉日薩姪野口之布同校」とあり、

小港　誕生寺住持豐永日良
堀内　妙法寺住持松村日澄　貲刻
桐生　寂光院住持椎日敬

となつてをる。やはり、大教院藏版で、須原屋が製本賣捌所、三軒の賣弘所がある。これで大體刻刊は中絶になつたかと思ふ。又別に『總勸文鈔略要』は妙地院龜校訂で村上勘兵衛發日

行。『綱要正議』坤卷は、守本文靜小林是純校訂で、又村上から發行である。その後、優陀那老和上五十回紀念として、脇田堯惇、加藤文雅、風間淵靜、加藤文雄諸師の手を經て清水玉谷日音師が、充治園全集五卷、附一卷を發行せられた。薩和上の遺志が始めて完成された。その時の脇田上人の告文は尊いものであつた。

私は、當時豪傑が駢ひ出で、共に胸襟を開いて相扶掖誘導し、不朽の事業を完成し、文明貢献の爲に努力活動を惜まなかつたことを見て、眞に美しく思ふのである。私心を挾まなかつたことを羨ましく思ふのである。そして、そのなかまに、はひり得なかつたことを殘念に思ふものである。（立正文化第九輯。昭和十一年十月十二日發行所載。十一月廿九日重修。林古溪）

○大日本人名辭書、佛家人名辭書等に、和上の著書として法華宗日鑑、又は日蓮宗日鑑といふのがあげてあるが、不明。恐らくは二十八宿日曆の如きものに、奸商の冒稱したものであらう。

熱海唱和集について

熱海唱和集は、明治十五年八月出版で、柳澤信大氏編輯である。第一卷「客樓雜詩」、清兮道人詩八十首。附錄、容月上人二十首。第二卷「詠歸餘事」、默雷上人詩五十六首。第三卷「避寒吟艸」、蠡舟居士詩、六十六首。いづれも、五絕七絕、五律七律、古體詩を合せ錄してをる。卽三上人一居士が、熱海浴泉中唱和の詩を集錄したもので、此人人は、御一新以來、共に佛敎興隆、社會事業、敎育事業に相携へた人である。何禮之先生は、八十四歲で、大正十二年に沒する最後まで、福田會育兒院のために盡力した人である。此集の發行は、三上人一居士が、金を出しあつたのである。柳澤信大氏は文部書記官である。

さて、その本は、小本で天地人の三冊になつてをり、縱六寸二分、橫四寸三分。初版は、唐紙刷であつた。合本物は、紙は白紙又は和紙、序文に出入があり、奧付が無い。初版ものを、默雷上人の御緣の御方が、態々立正へ屆けて貸して下された。その後、その御孫の默貌君が立正大學の圖書館へ一本を寄贈して下すつた。故大等上人と古溪との約を果して下さつたことで、深く感謝を表する所である。以下初版物について多少の紹介を試みる。

扉には、熱海唱和集と小篆の題があり、蠡舟居士題簽とある。次に大きく熱海唱和とあつて、明治十五年七月書於椿山莊とあつて有朋と署名してある。無論含雪將軍である。一枚半になつてゐる。その殘りの、裏の半枚と次の半枚とが開きになつて、熱海の風景畫が書いてあり。初隣歸驅、壬午夏日青浦生眞寫とある。印二つ、美眞、青浦とある。畫の裏の半枚には、題詩がある。

浴後敲棋醉後茶　客牕容易夕陽斜　閑遊不覺三旬久　荏苒春風至杏花　菊瀨

とあり。印に「吉敦」とある。卽ち吉雄敦先生である。其の次に、秋月新先生の序がある。

余讀熱海唱和集而有所感也。三子之詩。或精鍊邃至。或明鬯輕快。或冲澹簡遠。其所長不同。而各臻其妙。亦孰擇孰捨。微子去之。箕子爲之奴。比干諫而死。仲尼皆稱之曰仁。今余將曰此集有三妙焉。明治十五年五月。必山居士撰幷書。

次に鑑師の自序がある。

明治壬午二月。余浴痾於熱海溫泉。浴餘淸閑。興來而吟。興盡而眠矣。其詩亦烟雲過眼。隨唫隨忘。侍僧曰。請付之活刷。以爲歸遺。余曰。今世奎運之隆。傑作雄篇。陸續上梓。目食之徒。日飽大牢。蔬筍豈上齒牙邪。侍僧曰。屆到嗜芰。曾晳嗜羊棗。海內之廣。不可謂無同好。余時回顧。南山若帶雲笑者。因曰。山靈猶笑。世人之冷笑可知也。侍僧曰。南山之咲。孰與北山之瞑。遂奪去。立春後一日。雲衲鑑識于熱海客樓梅花香處。　　綾城原章書

とある。次に三士團欒圖があり、上部に、

高閣春風冷。青燈夜雨時。團欒三士話。一一入新詩。蘇堂併題

とある。これで卷之一の序は終る。本文は、枕山、中洲、敬宇の評を加へてある。最後に、

道心。與熱海之山秀出。詩思。與熱海之泉共湧出。故能寫出熱海景況。如躬游目睹。謂之熱海詩誌。亦何誣。明治壬午三月。拜讀于寒流石上一株松舍。中洲半隱士三島毅。

壬午四月　　敬宇中村正直拜批

とある。附錄容月上人詩の最後には、

三上人相逢一笑。遂唱和成此詩卷。世必傳以爲熱海三笑詩。虎溪三笑圖。不能復擅美于前。中洲三島毅拜閱。

誦經作詩。同是一物也。向上一著。則無言語文字。上人亦暫爲此戲耳。固不求工。而自有妙處。不容掩也。敬宇中村正直妄批。

とあつて、終となつてをる。第二卷卽ち地の卷は雨田上人の「詠歸餘事」。

合刻詠歸餘事客樓雜詩序。

詠歸餘事者。南無阿彌陀佛之餘唱也。客樓雜詩者。南無妙法蓮華經之雜聲也。夫山河草木。悉皆成佛。一色一香。無非中道。麤言細語。皆歸第一義。則登覽之際。觸景生情。衝口成章。何一非讃佛唱經之轉化者哉。默雷淸兮二上人。以詩作佛事。膠漆相投。固在于此。彼二宗相軋者。又何足言。明治十五年四月中瀚。敬宇中邨正直撰。　嘯竹居士伊藤賢書

次に、

詠歸餘事序

島地默雷。好詩。著詠歸餘事一卷。徵序于余。余諾而未果也。一日余與岡本監輔。行水道街。問焉曰。此際有夜市可觀乎。監輔曰。無有也。曰。目白不動若何。曰。是不甚行也。有大日佛。每月初八及念八兩次。市人出賽。男女往來。絡繹如織。爲此際第一。余曰。不動大日。本是無二。而其不同如此者。殊可怪也。監輔無以應焉。遂訪有井進齋。談及詩論。共評默雷之詩。俄然拍案曰。默雷說法。與詩法一體無二。猶不動之與大日。而說法不甚行。其詩獨鳴于世者。豈得非大日夜市之類乎。二人爲之大噱。乃去。書以爲序。明治十五年五月。得菴不識道人識。

小陽　柳澤信夫書

本文の方には、枕山、敬宇、南摩羽峯、得菴、中洲、必山等の評がある。最後に總評。

三島中洲の評、

佛徒。平生爭宗派。仇讎不啻。今讀此卷。唱和應酬。如乳水相入。不覺其爲異宗。蓋近日。洋教侵入。苟爲佛徒者。不問宗派異同。宜協心合力禦外侮。故忘平生鬩牆之怨。而然歟。余深爲佛氏喜之。若夫詩之妙。則抑餘事耳。姑任之讀者評論。壬午夏五。二松學究三島毅妄評。

南摩羽峯のいはく、

昔者。二祖慧可。坐香山而換骨。今默雷上人。坐熱海而肉骨。地之相距數萬里。世之相後數千歲。而其揆一如此。可謂奇矣。上人浴餘。有此雅什。玉毫金粟。燦爛奪目。非所謂琉璃咽珊瑚舌。不能著一語也。評終瞠若者。久之。明治十五年五月十日。南摩綱紀識。

次に跋文がある。

熱海唱和集跋

是二高僧一名士之詩也。繙而讀之。淸兮道人曰。病骨癯如鶴。默雷上人曰。瀕死去年羅大患。蠶舟居士亦曰。病餘瘦骨怯寒風。以是徵之。皆蒲柳之質耳。然而詩國對敵。何其强盛邪。背山臨水。建旗鼎立。甲排則乙拒。丙亦突起于其間。進搏鶴翼。退敷魚鱗。神出鬼沒。至

不可端倪。三師角勝。多多益善。未曾見香樹老子攻戰於吳江也。夫熱海之爲地。位富嶽之南。遠洋之北。而靈妙之泉出焉。然則三家之飲浴此泉也。化病骨而復仙骨。培蒲柳而爲松柏。養氣軟而得强盛者非邪。嗚呼借山靈海神之力。亦不爲少焉。而其詩之所以妙。雖性好而能之者。亦安知非山靈海神爲與有力乎。不識一名士二高僧。果頷之乎否。　渤海漁夫樹臣撰。

此の人、印記に厚東樹臣、默也とあり、

第三卷は人の卷、蠡舟居士の「避寒吟艸」である。

避寒吟艸序

余既作默雷淸兮二上人詩序。而蠡舟何君。寄示一卷曰。此亦將合刻者也。讀之淸麗秀拔。知得江山助多矣。昔黃筌從蜀後主王衍於內殿。觀吳道元所畫鍾馗。後主曰。此圖以右手第二指抉鬼目。不若拇指爲有力。令筌改之。筌不用道元本。別作以呈。後主怪之。筌曰。道元所畫。眼目意思。皆在第二指。今臣所畫。眼目意思。皆在拇指。後主嘉悅。余文亦然。欲改作二緇一素合刻序。則前稿全歸無用。故別作小序。以弁此卷。雖然二上人見之。將笑曰。此亦無所分別仁者自生分別想耳。明治十五年四月下澣。敬宇中村正直撰。

詩の評者は、枕山、敬宇、吉雄菊瀨、成島柳北等である。總評にいはく、

學軒並木習書

明治八年夏。余避暑于箱根。旬餘無一詩。歸來亦無一詩。如三上人一居士者。以作詩養病。余以不作詩消閒。不知何者爲上。余之是言。似高而實卑也。世間外作大言。內掩其拙者多矣。不立文字一派。不得藉口於其間。壬午四月二十五日。敬宇中村正直拜批。

寫景敍情。唯其所欲言。而筆不窘束。極是難事。古稱詩有別才。君勿乃其人乎。更加鍛鍊之功。則騷壇無復勍敵矣。余輩固當避三舍也。妄批亂塗。幸恕焉。壬午三月旬三日。菊瀨吉雄敦拜觀。

詩が終ると、跋がある。

客年一月。余浴病熱海。邂逅蠡舟先生于嵐紫潮碧之境。詩酒追陪。大慰無聊。本年一月。又拉山妻遊。先生亦携內在隣館。旦暮往來殆如一家。會家信報女兒劇病。余急裝歸矣。而先生猶留數旬。賦古今體無慮數十首。頃日錄爲一卷。示余。夫先生之詩。淸秀雅澹。諸大家既有定評。余復何贅焉。先是。余航歐洲。謁先生於巴里城中。歡晤數旬。歸朝之後。久絕音信。而熱海兩遊。不期相逢。以償平素欽慕之懷。噫余與先生。疎於家居。而親於行旅。亦何其奇

緣也。來歲一月。余欲例遊熱海。見先生于嵐紫潮碧之境。不知先生肯之否也。明治壬午首夏。柳北成島弘拜識。

庚峰木修書

熱海唱和集跋

壬午之春。淸兮容月雨田三上人。及蠡舟先生。偶浴熱海。數旬而歸。唱和之詩。各滿其囊。余請而讀之。誠思一時興會出於偶然。而不可復得也。於是手編而上諸梓。若夫詩句之妙。則有諸大人高評在。豈復用余之贅言乎。小陽小史柳澤信大拜識。

以上で序跋及び體裁を述べたのである。詩の內容については、申す必要はなからうと思ふ。しかし、御覽の通りの名家の評なり、序跋なりが澤山あつたため、當時特に有名で、高評で、爭うて之を手にせんとしたものであつて、度々刷出され、洛陽の紙價爲に貴しであつた。

最後の、奧付下の如し。

明治十五年八月十二日出版御屆
編輯人　東京府平民　西江戸川町廿一番地　柳澤信大
出版人　同　麴町四丁目十三番地　磯部太郎兵衞
發兌人　同　銀座二丁目　岸田吟香
同　神田五軒町　林安之助

（十一年八月古溪記）

新居文庫經營の記

和上が遷化せられると、全國各地で、追慕報恩の法要が、度度行はれ、追憶讃仰の講演說敎も方方で行はれたのであつた。中でも二本榎大檀林、延山、池上、阪府各寺院などでは、百箇日まで怠らず勤められ、山本諦師は、最初一七日間每日、その後七日七日と百ケ日には、法華懺法を嚴修せられた。三回忌は延びて廿五年十一月に行はれた。廿六年になると、純眞誠篤なる大檀林學生一同が發起し、廣く書籍金品の義捐を天下に需め、新居文庫を設立せんと企てた。そこで依賴廣告を諸方に送り、日宗新報、敎友其の他にも廣告文を記載したのが、廿六年の十月頃であつた。その處分を終つて、精細報告、禮狀を出したのが、廿八年七月であつた。新居文庫は燒亡してしまつたが、その學生及寄贈者の誠意は永く後代に傳ふべきものである。よつて此の篇を集成したのである。

○雜誌記事

故日薩大僧正紀念義捐書籍募集　大檀林の學生諸子が發起となり同林內に新居書籍館を設けて同大僧正の紀念とせんとの計畫ありし由は豫て紙上に報道せし所なるか愈廣告欄にあ

る如く廣く十方有緣の諸彥へ募集のことに着手せらる。

（二十六年十一月十日日宗新報第五百十一號、以下毎號廣告）

○

故日薩大僧正紀念義捐書籍募集　東京大檀林の學生諸子が發起となり同林内に新居書籍館を設けて同大僧正の紀念とせんとて此程廣く十方有緣の諸君へ募集の廣告を發したり。

（教友百九十五號以下）

○

○故日薩大僧正紀念義捐書籍募集

明治維新排佛毀釋の論盛なりし時に當り粉骨粹身以て宗脈を維持し紛々擾々四分五裂の宗内を統一して宗務院を設立し以て宗家の秩序を確定したる者は誰ぞ諸檀林を開創し以て人材を養育し宗家今日の學事あらしめたるは誰ぞ故日薩大僧正其人にあらずや嗚呼大僧正は宗門維新中興者なり興學布教を盛ならしめし先導者なり然らば異體同心の祖訓を奉する吾が蓮門同胞たる者は豈に其紀念の擧なかるべけんや況んや親り大僧正の董陶を受けし者をや況んや現在檀林に在て從學しつゝある者をや此を以て生等相謀り其紀念の爲め廣く義捐書籍を募集し新居書籍函を新造し之を大檀林圖書課に納め長く之を保存して以て薄資の學生に貸渡し聊か大僧正の興學の遺志を補けんとす冀くは同感の諸賢哲夫れ起ちて其高義を揮ひ賜へ。

明治廿六年　月　日　　發起人　大檀林生一同

故日薩大僧正紀念義捐募集略則

一、義捐書籍は其新古及び完不完を問はず佛漢英三學の三種類とす

一、御寄贈の御便宜に依り書籍代として金員又は郵便印紙を御送りあるも御勝手の事

但し金員御送の節は本會は之を圖書課へ納め必要書籍を購求せしむ

一、書籍の部數及金員等の多少は御隨意の事

一、御寄贈の書籍等は本林助教河合日辰權僧都に托せしを以て金員は同氏へ宛御送を乞ふ

但し郵便爲替拂渡局は東京三田郵便支局の事

一、御寄贈の諸師は御住所姓名を詳記して御送りを乞ふ本會は之を新造する新居書籍函に記入して其芳名を長く保存す

一、御寄贈の運賃等は御自辨の事

一、御寄贈の書籍等は明細に日宗新報へ廣告す

一、締切時日は明治廿七年七月三十一日迄とす　（以上）

（日宗新報五一一以下、教友二〇〇以下）

○

新居文庫　大檀林學生諸士が發起にて新居文庫なるものを設置する由は過日の廣告にも見えたるが、爾來追々書籍其の他を義送せらるる向もこれある由にて漸次隆昌に赴くといふ左もあるべし。

（日宗新報五二三號廿七年三月五日）

○

新居書籍函　は新居大僧正紀念のため大檀林現在生が發起したものにて益盛大に赴くは數々報道せし所なるが時日の切迫するに從ひ事務繁忙に成り行くを以て目下委員を撰み各部を分けて之を擔當し居るといふ又聞く所によれば本宗上流者は概して之に賛成し非常に補助を與へらるる向多き由にて來る八月七回忌の法要迄には書籍目錄及報告書等を作りて義捐者に配布することに定まりしと云ふ。

（日宗新報五百三十一號廿七年六月十五日）

新居書籍義捐者第一回報告（今ハ書籍ノミ掲ゲ金ハ錄セズ新報往見）

○會本三大部全。同講義全。（小林林長殿）　○遺文錄（大本）。（磯野教師殿）　○萬代龜鏡鑑一。護法明鑑五。（河合助教殿）　○一念三千論。（三宮廣瀨彦作殿）　○倶舍論。起信論。同講義。左傳。淮南子。莊子。（福井妙國寺太田日昭殿）　○因明入正理論一。同本作法講義一。（淺井潮盛殿）　○釋籤一部。（長勝寺鈴木日諦殿）　○廳諫報國篇寫本一。本化結要廳練錄寫一。（福島法華寺森本壽音殿）　○鈔錄物。（右檀中二瓶惣吉殿）

第二回報告。　○說法明眼論。數珠經辨譯。德行記。釋氏廿四孝。法華隨力抄。念佛如教抄。受不受決疑抄。千代見草。衣裏寶珠抄。（藤原日迦殿）　○歷史哲學一。老子道德經。徒然草。（栗原泰洲殿）　○十部祖書。御義口傳（下一）。決定論。早勝問答。祖書續集。法苑珠林合本三。說教落草談上下二。神代卷。神道總論。宣道津梁。耶蘇譬喩略解。使徒行傳。馬可傳略解。人身究理。物理階梯。（高木行運殿）　○教誡律儀集註。三道中心錄。（增田見猛殿）　○安國論說義。壽量品宗義抄。題目抄。如來秘藏錄。闢邪錄。正續文章軌範全。（淺井惠涌殿）　○四書集註。（龜谷鋥鋼殿）　○訓點千字文。老子經。不輕品宗義抄。故事便覽。（末吉啓沃殿）　○唯識三十頌要解。二十唯識述記。（西村觀誠殿）　○教誡新學比丘行護律儀。洋書端本八。（遠藤宣德殿）　○三千論。（下野妙光寺大門了玄殿）　○十二宗綱要。洋書端本四。（藤田讃翁殿）　○壽量品宗義抄。神力品宗義抄。不輕品宗義抄。窮理問答。國法汎論。（加藤龍敬殿）

第三回報告。　○三大部會本。全。倶舍論。全（堺與國寺前住三宅英竟殿）　○菩薩戒經義疏。全。大四教儀。

四念處。指要妙諺詮。教誡律儀。圜悟碧巖集冠註。法華直談。(内六、不足)。三籤考拾記(九十、不足)。拈評三百則。永平元禪師清規。孔子家語全。五經全(宗延寺小林潮純殿)　○幼學詩詮。物理階梯。本教要話。算盤傳授。(北村詮林殿)　○漢文獨習軌範。文語粹全。文藻行潦。(本朝善才殿)　○四教集解。文林全。文講錄(一—十迄)。四教義山簣。四教義。緇門崇行錄。(神奈川淨瀧寺遠藤日順殿)　○註畫讃鈔。宗門緊要集記。復神武帝勅五憲法。文句格言二部(但シ一八端本)。經傳拔要集一。本化別頭高祖御傳記一部。古今和歌集。考經大義全。指要科解全。(松山法華寺貫名日明殿)

第四回報告。　○倶舍論頌釋疏全。春秋左氏傳全。荀子箋釋全。(萩原元式殿)　○易經集註。四書匯參。(三重圓妙寺服部日穰殿)　○他受用御書。御書和語式。孔子家語國字解。(岐阜覺林寺水野潮存殿)　○法界次第。梵字譚。二教合璧論。老子。古語拾遺。出定笑語。贈答百人首。草菴集類題。法令類纂。國史略字解。同字類。大日本精圖。竹田畫譜。義烈百人首。秀雅百人首。唐詩選唐音。使徒行傳。教誡律儀。首題要義。唐詩選。佛遺教經(加藤智龍殿)

第五回報告。　○易學啓蒙全。(三重圓妙寺服部日穰殿)　○法苑珠林全。(神奈川本久寺三枝松日然殿)　○宗義抄。(北海道久保田要瑞殿)　○詩經集註全。(三河長滿寺深谷日脫殿)　○唐詩選全。佛界一覽全。習字本一。(星野文山殿)　○原人論全。法華綸貫講要全。書經集註。(林雪法殿)　○壽量品宗義抄。涌出品宗義抄。本尊略辨。書經集注。(渡邊英明殿)　○觀心本尊抄。(增田見猛殿)　○顯戒篇。八家文(端本十二卷)。說教學。原人論。弘經要義。四教義山簣。リーダー端本。遺教經節要。釋教正謬初破全。(吉田存義殿)　○綱要正議上卷。山伏問答記。殿中問答記。因明入正理論。出定後語。(五十嵐英淑殿)

第六回報告。　○天台大師略傳。法華考異。(豐前實成寺加藤日龍殿)　○正善論。三千義。(飯田惠濟殿)　○妙玄和本三冊。比丘六物圖私記。法相義依釋。岡本子。東京字林玉篇。英語獨案內。插譯綴字書。(大木寬山殿)　○廣弘明集三十卷。韻會全十卷。玄義講義寫本十卷。古今和歌集全二卷。徒然草鐵槌全四卷。(小林日董殿)　○中正論二十六卷。麓草分一卷。小學四卷。(安藤暹妙殿)　○大論目錄付。(麻布妙善寺永井善雅殿)

第七回報告。　○希臘史全一冊。小文典全一冊。米國史全一冊。英和字典全一冊。(今村文雅殿)　○高祖御讓狀註釋。金剛錍釋文。四書全。法華直談鈔(端本六)。(下總妙國寺高津日央殿)　○起信論。同講義端本二冊。龍華傳抄。龍華歷代師承傳。(三河長滿寺深谷日脫殿)　○法華觀心贊。(右前住上杉日信殿)　○四教集解。錄外微考。(三河松林坊永谷春覺殿)　○緇門崇行錄。壽量品宗義抄。古今和歌集。(三河宗德寺島日乘殿)　○壽量品宗義抄。(三河圓融寺尾崎春達殿)　○首題要義。(三河長久寺後藤鳳玉殿)　○一經神靈難義問答抄。(河合日辰殿)

第八回報告。　○天台四教儀直解。和漢合類大節用集(富山長清寺岡田嶺逞殿)　○國語定本。(嵯峨惠觀殿)　○法華綸貫講要。(愛知縣淨圓寺後藤潮順殿)

第九回報告。　○古訓古事記。(島日乘殿)　○起信論講義。(深谷日脫殿)　○天台三大部講義。(岡山盛隆寺印日燈殿)○法華新註抄。大學衍義。(岡山日應寺逸見日謙殿)　○說法百花園。同巍々篇。同言々海。擊蒙論。四教儀集解。山陽詩註。英吉利會話。日本外史。日本樂府。英文典。スペルリングブック。詔令集。(富

山妙傳寺富田海音殿）○祈禱辯。闢邪論。祀先辨謬辨。天道溯源。（安藤遲妙殿）○妙宗本尊辨。指要抄詳解。四書講義。明治詩語粹金。（田中惠音殿）○教誡儀指要鈔。草山要路。天台四教儀。二十唯識述記講錄。佛祖三經指南。（塚田玄明殿）○佛教論評。西洋事情端本。小學全。日本立志編端本。天道溯源。法苑珠林。本朝法華傳。三世因果經。起信論義記。指要鈔略解。（京都本法寺伊藤日修殿）○四恩抄。指要根源抄。四明十義抄。文句諸品要義。金錍論。授決集。四教集解標指抄端本。觀心本尊抄。（山梨長遠寺望月是惠殿）○立正安國論。撰時抄。報恩抄。宗門緊要集註。（内船寺村瀨日周殿）○心性院日遠上人親筆雜錄。聖德太子憲法。梧窓漫筆。脉法圖解。祈禱故事略旨。四教儀科文。後三教見聞。日向記。備前老人物語。備前文明亂記。妙善寺合戰記合本。老人雜記。地震聚報。受不受評論集。發端立敵。演說略錄。神囑宗義抄。立憲政體略。（相模本光寺三宅日鐘殿）○改刻西谷名目。起信論義記。王註老子。略述法相義。四書集註。（玉泉院倉田寛靜殿）○回向儀註釋。加持祈禱肝文。崐玉撮要集。（甲府菊島久造殿）

第十回報告。○因明瑞源記。（佐賀永井英迅殿）○高祖遺文錄。（武見日照殿）○指要抄會本。妙玄義。草山要路。本迹歸宗論。天台四教儀直解。西谷名目。（岡田教篤殿）○倶舍略釋記十四冊。（深川觀察殿）○莊子齋口義發題。（海内顯壽殿）○神代評撰記。崐玉撮要集。御義口傳。（木田泰教殿）○諫迷篇。指要抄會本。（首藤泰然殿）○根氏教授篇。（身延學院内吉田秀學殿）○祖書綱要。（松村日澄殿）○本化宗法一道記。文句輔正端本八冊。註畫讚鈔全。集解新抄。西谷名目。毛詩正文。（藤田唯進殿）○宗源論。冠註因明論。（稻田海素殿）○教育百科全書廿五冊。傳習錄。（野澤義眞殿）○萬國史一冊。スイントン第三讀本。同直譯。ローヤル第四讀本。クライブ傳。ラセラス傳。スタンレー。（大澤日妙殿）○文句別本。（辻日達殿）○指要鈔。近思錄。（大橋日昇殿）○玄義一二、二冊。（高橋探禪殿）○法華本迹雪謗。（岡本日信殿）○大藏經端本十函。（松ヶ崎本涌寺殿）○起信論講義。（海津英舜殿）○史記評林。（相澤智存殿）○聖語掇輯。獅子絃。法華秘略要妙。（河合日辰殿）

〔已下別口三百十七冊。〕○貞觀政要。草山集。前漢書。後漢書。綱鑑易知錄。伊洛淵源錄。唐鑑。言行錄。名節錄。箋註蒙求。劉向新序。開口新話。江戸繁昌記。闢邪小言。同管見集。國語。近思錄。古文眞寶前集。古文眞寶後集。四書白文。釋教正誤初破。紀效新書。兵要錄。近世詩林。純正蒙求。宕陰存稿。通議。方正學文粹。王陽明文粹。初學文軌。古詩韻範。官板文章軌範。言志錄。史略。艮齋文略。宋學士。愛日樓文集。壎篪小集。語通。已上惣計三百十七冊。

右は明治九年埼玉縣北足立郡青木村宗信寺住職高橋泰長師より故龜谷日長和尙冥福の爲め該管内宗學林へ寄附せしものにて其後該林廢林に付爾來管内共有として所藏の處今回一同協議の上新居文庫へ轉納致候者也

埼玉縣寺院惣代鷲峯日慧　前寄附主高橋泰長

○四教儀山賓。菩薩戒經義疏會本二。同講義二。神王紀略五。古語拾遺言餘抄三。神代記葦牙三。古訓古事記三。神道五部書三。十八史略七。唐宋八家文格五。英和字彙一。（根本寺筐日洞殿）○涅拌會疏等端本廿五冊。（田中耀運殿）○コーネル氏中地圖。ダルトン氏生理學。ロレンス氏眼科論。（中里日勝殿）○朝鮮板

妙經疏七冊。(池田是俊殿)○小學四。國史略字類二。獨案內二。政事社會一。惹隱氏倫理學。(加々美玄和殿)
○涅拌會疏端本四。敎觀大綱見聞二。止觀義例條目一。中正論等、端本十五冊。(田中耀運殿)。以上。

東京大檀林發起者

已下寄附金にて購入書目

○新居文庫購入書目廣告　○華嚴匡眞鈔全十冊　○文句箋難全四冊　○善惡報應編註同五冊　○楞伽集註同四冊　○金錍論私記同一冊　○啓蒙拔萃同十三冊　○止觀義例同六冊　○西谷名目同四冊　○法華論疏同三冊　○眞言密敎部類惣錄同二冊　○淨土十要疏同二冊　○梵網古迹溫知同六冊　○諸禮讚同一冊　○觀音義疏記同四冊　○觀心誦經法會記同一冊　○造像功德經同一冊　○涅槃像隨文略讚同三冊
○敎觀撮要同一冊　○敎行樞機同一冊　○諸經要集全二十冊　○佛說齊經科註同一冊　○三私記同一冊
○止觀撮要全七冊　○法華開題同二冊　○大日經疏同卅一冊　○止觀猪熊問答同十冊　○慈慧大師廿六條式同一冊　○止觀義例纂要同六冊　○起信論講義同三冊　○本朝法華傳同三冊　○雜私用抄同三十冊
○起信論筆削記同五冊○相宗八要直解同四冊　○光明最勝經同二冊　○法華入疏同二十冊　○三界義同一冊　○台嶺眞珠集同十冊　○六祖壇經同三冊　○念佛往生導劄同二冊　○圓宗鳳髓同二冊　○不二門詳解同五冊　○天台問要自在房同十冊　○梵網古迹記輔同五冊　○五百問論同三冊　○內外二境結錄同三冊　○戒疏順正記同二冊　○三頌偶拈同一冊　○觀音玄義記同四冊　○觀音玄條箇全一冊　○華嚴指歸全一冊　○北峰敎議全一冊　○淨信堂答問全一冊　○四明十義同二冊　○淨名經玄義同一冊　○維摩三觀籤錄同二冊　○弘決外典鈔同四冊　○止觀大意講錄同一冊　○刪定止觀同三冊　○要法文同三冊
○一乘要決同一冊　○蘇悉地經疏同七冊　○心地敎行決疑同六冊　○止觀復眞抄同四冊　○宗要集智見抄同八冊　○例講問答書同八冊　○徧界紅爐雪同一冊　○梵室偶談見聞錄合本同一冊　○金剛槌論同一冊○式體續芳訣同一冊○止觀釋要同四冊　○佛心印記同二冊　○守護國界章同九冊　○止觀宗圓記同五冊○小止觀抄同三冊○賢首五敎儀同五冊　○觀心略要同四冊　○觀音玄義鈔同三冊　○佛像標幟義箋同三冊　○圓頓章合記句解同一冊　○國淸百錄同四冊　○成唯識述記集成編同四十五冊　○梵網經戒經疏紀要同五冊　○花嚴孔目章同四冊　○花嚴探玄記同二十冊

已上此代價金五十五圓十八錢一厘也　以上

○新居文庫有志義納統計略表

寄附書總數　一千七百七十一冊也

外黃檗板藏經十函

四百十冊購入分

總計寄附金　八十三圓九十四錢也

總支出金　七十八圓四十四錢也

內譯

金五十五圓十八錢一厘

金十二圓八十五錢五厘　藏經荷造運賃持込料一切の拂
金四圓十五錢　郵便之代
金六圓廿五錢四厘　活版料持込料等外諸入費
差引金五圓五十錢殘り
金三十圓廿六錢也　書物箱製造費
殘金五圓五十錢　右の函代に宛て猶不足の分は大檀林圖書課の金を以て補ふこととす
右之通相違無之候に付此段報告仕候也

明治廿八年七月

東京芝二本榎大檀林内新居文庫
監督　河合日辰
幹事　山本隆海
同　西山是端
同　佐野是秀

全國有志各位中

○

以上によつて新居文庫、新居書籍に、凡二千二百冊と黄檗版藏經十函との收藏せられたことが分るのである。大正五年の失火によつて、悉く烏有に歸してしまつたのは、まことに殘念なことであり、哀惜に堪へないのである。重ねて關係者御一同に深厚の敬意を表する。

○野口周善師より

日薩上人は度度桐生へ來られたらしいですが、その都度墓參をされたさうです。私の拜したのは、最後の御墓參かも知れません。私は水桶を持つてお伴しただけです。無論御話など承つたわけではありません。

御母上の事は、過去帳には、戒名があつて、年月があつて、「二丁目新居宗右衛門妻。江戸ニテ死亡」としてあります。一體新居は大きな族で、本家は新居小八郎といふので、丸山とも砦山ともいふ小山を全部占有してゐます。昔の城あとだといひます。その分家に、宗左衛門のまきがあるのです。當時の本家の主は佐吉といふのでした。寺に墓がありますが、大きな石塔が澤山あつて、其の墓地は本堂の裏から西側へぐるりと取捲いてをります。宗左衛門の方の墓もその中にあつて、大きく場處を取つてをります。

善左衛門、宗左衛門父子の信仰問題、訴狀詫狀等の文書が殘つてゐます。多少史的參考になるかと思ひます。改宗はしなかつた形になつてゐます。時代の一面が見られます。

（五月三日桐生淨運寺）

昭和十一年五月七日起
昭和十二年六月廿五日成

立正大學內

薩和上遺稿事蹟編纂會

委員長　立正大學學長　清水龍山
委員　立正大學學部長　守屋貫教
委員　立正大學講師　林竹次郎
審美書院　野口駿尾
助手　戸田浩曉
助手　戸田慈秀
校正　藤山英雄
校正　林大

昭和十二年六月二十五日印刷
昭和十二年六月三十日發行

【非賣品】

東京市品川區東大崎四丁目立正大學內
薩和上遺稿事蹟編纂會代表
編纂者　清水龍山

東京市芝區二本榎一丁目十五番地
發行者　馬田行啓

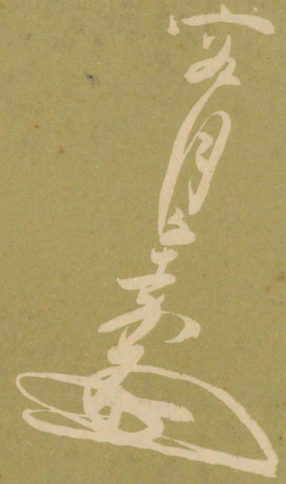
東京市京橋區銀座西三丁目三番地
株式會社審美書院內
印刷者　野口駿尾

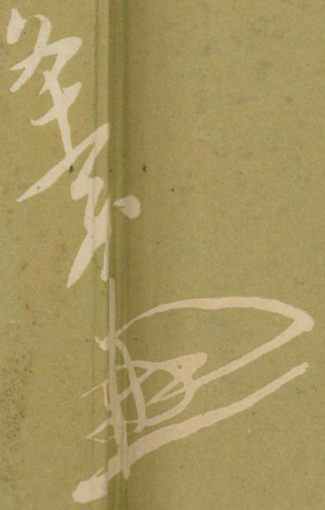
東京市芝區二本榎一丁目十五番地
發行所　日蓮宗宗務院

不許複製

7
1

732
118





林　竹次郎

道名文貞日節。姫路藩永田三象次男。古溪と號す。始め和上の弟子となり、永野嶺山師の弟子となり、又和上の膝下に歸り、脇田上人に從ひ、十七歳得度す。道名は文靜師の附する所。池上檀林敎師。後、宗門の紛擾、寺門經營の不合理、敎育の不全に憤慨し、去つて敎員となり佛敎信仰を鼓吹す。法籍を存せず。昭和八年以後立正大學に講師たり。

以上は遺言狀當時の「遺弟表」に記錄されてゐたはずのものである。さて文靜師は遺言や遺弟表の時には何か色〻のことがあつて、除外されたが、遺品は隨分受取られたらしい。

文　靜

文靜日與上人　院號無し

和上歿後、法緣の決議により、一周忌法要の時遺弟に加へらる。俗姓守本、松竹と號す。江戸牛込の人。元、大車院上人の弟子なり。蓮久寺、南谷時代より常に側にありて文筆に從事す。後平山見榮師と共に同人社に學び、沙彌校敎頭、池上中檀林林長、京都中檀林林長。大河原淨蓮寺。比企谷本行院より、本山海長寺に晋む。日淸日露の役、從軍布敎使たり。明治四十二年五月二十六日寂。壽五十六。池上加歴六十九世。松竹遺響二卷、世に行はる。

其の他

石川惺亮、一名桂巖

守本文靜師の肉弟といふ。神樂坂善國寺の住持たりし時、年僅に十八才のみ。後、俗形をなし、石川將軍と號し、街頭に旗を建て、或は馬上に於いて折伏逆化を强修す。その後上洛、忽ち節を改め、吏となる。歸東の後、遂に振はず。昭和三年四月廿四日寂。谷中感應寺に葬る。法輪院日運上人。

淸水　梁山

愛弟の一人。府下神代村の人。俗名福一郎。法諱日師。後府下深大寺に學び天台の徒となり、引聲念佛を行じ、遂に引聲題目を主張し、盛に讀誦謗法を首唱す。之に依つて擯出せらる。かつて立正大學に講師たり。昭和三年二月十日寂。生田安立寺山中に葬る。

別に

戒　靜

妙地院日龜上人

姓久保田、駿州三保の人。靈龜と號す。村松海長寺大尊寺日貫上人の弟子なり。安政六年、